
最強魔王と下僕様!?

Nerine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強魔王と下僕様！？

【Nコード】

N0491W

【作者名】

Nerine

【あらすじ】

無気力・無関心の駄目人間。悲観でもなく現実として、自分不幸だと受け止めて毎日を過ごしていた高校生「中野一樹」は、ある日不思議な声を聞いた。そして、選ぶ事になる。

タイムリミットは1年。

神様に嫌われた1人の高校生は、小さな小さなファンタジーと出会

った。

「俺、そんなの望んでなかったんですけど！」

さあ、扉は開いた。

その先にあるのは、現実と幻想からなる真実だ。

プロローグ

例えば俺が、世間一般の”普通”に当てはまっていたとして。

みんなの為に自分が犠牲になるか、もしくは、自分の為にみんなを不幸にするかの選択を迫られたとする。

果たして、どちらを選ぶんだろう。

夜。街頭も少ない裏道を歩き、背中に気配を感じながら、そんなことを考える。

考えて、止めた。

だって、意味のないことだ。

”普通”に嫌われている俺がいくら望んだとしても、きっと叶うことはない。

だって、そうだろう？

異常が普通で、そしてそれに納得していたら、それは自分にとって普通以外の何ものでもないんだから。

(・・・なんか、ややこしいな。)

自分で考え始めといて、結局はこんがらがってしまい、軽く頭を押さえる。

その間もずっと、自分の足音に合わせて続く音。

「なあ、まじで着いて来るつもりか？」

俺の足音がコツコツだとしたら、トコトコとかなり軽く小さな足音がピタリと止まった。

軽いため息をつきながら俺も止まり、空を仰ぐように振り向く。

（今日は、星がまったく無いな。）

まったく無関係な事を考えながらソイツを視界に入れれば、小さな唇が歪んだ。

「当たり前だろう？」

その口から覗いたのは、鋭い八重歯。

「私はお前の、ご主人様になったのだからな。」

見た目幼稚園児の様なその子供は、更に歪んだ笑いを浮かべながら異常な言葉を口にした。

（夢だったってオチには・・・ならないんだろうなあ。）

俺は今日、世界で一番不幸だった。

そして、幸運だったのかもしれない。

俺の人生は比較的不幸が多く、それでいて幸運なんだと思う。

自分の中での記憶のスタートは、中学生から。つまり、それ以前の記憶を失っている。

まずこれが、一番代表的な不幸だ。

そして、母親と父親共に2年前に他界。

兄弟は、兄が1人と妹が1人いるが、両親の葬式からずっと会っていない。

だけど、それぞれが別々の場所に引き取られたというわけではない。

2人の兄弟は母方の祖父母に引き取られたが、どうしてか俺は拒否されて一緒にいることが出来なくなった。

あー、違うか。拒否したか、もしくは強制されたのか。

なぜかと言うと父親は、元は結構な名家の出で、しかも長男。だけど、母親はごく一般の家庭の生まれだ。

だから、駆け落ち同然の結婚だったらしい。

両親が死ぬまで絶縁関係もいいところで、なのに俺だけが父方の家へと引き取られた。

なんで兄弟の中で真ん中の俺だったのかは、たぶん、兄貴はでかくなりすぎてて、妹は幼すぎたからなんじゃないか。

んで、わざわざそんなことをした理由は、父親の弟、つまりは俺の叔父とその息子達があまりに馬鹿すぎて不安になったからだろう。

こいつらに跡を継がせたら、歴史的な名家が落ちぶれるんじゃないかって。

だからこれに関しては、平凡から一気に金持ちの仲間入りができたから幸運の部類だ。

だけど、それからの生活を思いだしてみれば、足して二で割ったとしても不幸。

そんな幸運で不幸な俺の名前は、なかのいつき中野樹。

複雑な家庭を持っていて、最近高校生になったばかりの若々しい16歳。

そして、誰よりも無気力という言葉が合う人間。

そんな俺はある日、とてつもなく不運で、それでいてとても幸運な出会いを果たした。

「つき！私の命令を聞けと言ってるだろう！」

「嫌だ。めんどい。」

目の前にいる、クソガキとの出会いを。

「貴様、ご主人様の命令が聴けないというのか！」

黒い髪に黒い瞳。日本人らしい特徴をしていて、そのくせ幼児のくせにえらく綺麗な顔立ちをしたこのガキは、どうやら俺のご主人様

らしい。

(あゝ、なんでこう子供ってちょこちょこして鬱陶しいのかねえ。)

「つーきー！いい加減素直になれ！でないとお前は、後1年命なんだぞ！」

「分かった分かった。だったら後1週間になったら頑張るよ。ちなみに俺の名前はいつき、だ。呼ぶなら正確に呼んでくれよ、ゴシユジンサマ。」

「むつきー！貴様の名前は呼びにくいんだ！」

そして、ついでのついでに言えば、俺の命はこのクソガキによって後1年しか無い。

でも、1年って微妙に現実味が無いっていうか、中途半端だと思う。

焦るものも焦れないっていうか、まあ元々、後1週間ですって言われたとしても俺は動じないだろうけどな。

「あーもう、煩い。ほら、飴でも食って落ち着けよ、ゴシユジンサマ。」

「え、あ、くれるのか？なら貰ってやらなくもないぞ。」

少し意地悪く、子供の口には大きすぎる大玉の飴をやれば、何がそんなに嬉しいのか満面の笑みで受け取り、一生懸命口にいれようと頑張る。

そんな姿にちよっと笑えながら、小汚く狭い部屋の半分を占めてる

ベッドに横になった。

「つき！これは、どうやって食うものなのだ？もしかして、普通の飴とは違うのか？」

そして、困った様子で掛けられる声を聴きながら目を閉じれば、浮かんできたのはこのガキとの出会いだった。

3日前の夜、俺達は出会った。

「つーきいー！寝るのか？」

切れない絆の代償に、魂を引き換えにして。俺は、ファンタジーな世界の扉を開けたんだ。

プロローグ（後書き）

ゆっくり更新。

それでもよければお付き合いです。

1 - 1 乱れた心

「25時まで、名だたる方をお呼びしたお食事会がある為、26時まではお戻りにならないようにと奥様から言伝を預かっております。申し訳ございませんが、その様に取り計らって頂いてもよろしいでしょうか？」

「・・・分かりましたと叔母様に伝えてください。」

「ありがとうございます。では、これで。」

「はい。伝言ありがとうございます。」

カチリ、とシンプルな黒の携帯を閉じて大きくため息。
軽蔑を含んだ口調を聞くのは、毎回疲れてしまう。

中野家。たぶん、その名前を聞いて動じない金持ちはいないだろう。先祖には総理大臣がいた程で、未だに政界や大企業に通じている名家中の名家。

俺は、その名家の現当主の長男の子供だ。
だけど、父親であるその長男は、一般家庭の女性との結婚を望み家を飛び出した。

だから2年前まで、自分がそんな金持ちの血を引いてるなんて思いもよらず。

でも、両親が事故で他界した時から、俺はそんな金持ちの家の一員

となった。

だけど、それは決して幸運だったわけじゃない。両親がいなくなったにもかかわらず、一般家庭より裕福な生活を出来ていることは勿論幸運だと思う。

でも、父親には弟がいて。その弟が、表面上は跡取りとなっているわけで。

さらに、俺にとって叔父にあたるその人には、生まれながらのお嬢様で、中野家のトップの妻になるのが目的の奥さんがいて、そして、息子が3人いた。

となると、だ。

いない人になっていた兄の子供が、突然その輪に入ることが面白くないのは当然。

こうやって、俺が各界のお偉いさん方と会わないようにやかまれるのは今日が初めてでは無い。

携帯を閉じる際に見た時間は確か、午後1時。

最近入学したばかりの、というか無理やり入れられた学校の屋上で言われた時間までどうやって暇を潰そうか考える。

(つーか、高校生に深夜徘徊を許すなっつーの。補導されたらどーすんだよ。)

でも、浮かんでくるのは不満ばかり。

(まあ、補導されて困るのは俺だな。)

さらには、気が滅入ってくるだけで。

「はぁ・・・ダルいなあ。」

結局、ため息しか出なかった。

「それにしても、腹減った。」

今日の昼ご飯である野菜ジュースのパックを吸いながら、どうしても自分を不幸だと思わずにはいられない。

無気力に空を見上げれば、限りなく晴天。
その爽やかさに、思わず苛立った。

「これから、どうします?」

「今日、俺のこのパーティー来るんだろ?」

学生の性分である1日の授業が終わり、一気に校舎がざわめき立つ
放課後。

アホらしい会話が耳を通る中、一人教室を出ようと席を立つ。

「樹君、もう帰ってしまうの?」

そんな時、一人の女子に声を掛けられる。
瞬間、眉間に皺が寄るのを我慢出来なかった。

「・・・何か？」

質問には答えず、学生鞆を手に掛けるのも止めない。

なのに、見るからにお嬢様ですって雰囲気を晒しているその女子は、何が可笑しいのか笑った。

「だって、今日はお家でお食事会があるのでしょ？」

すると一斉に、教室がクスクスという笑い声で満たされた。

そう、俺を馬鹿にするように。ていうか、馬鹿にして。

「だから？」

今日の俺は、いつにも増したため息の回数が多い気がする。

大きく息を吐いてから、めんどくさいですってオーラを前面に押し出して、すこし長くなっている髪をかき上げた。

そして、隠すつもりもなくその女子を睨み付ける。

こういうのも、この学校に来てから日常茶飯事だ。

金持ちのご子息達が通う、私立の名門高校。

つい最近まで一般家庭にいた俺は、この学校にいるお嬢様、お坊ちやま達にとつて、面白い玩具以外の何でもない。

どこにいたって、何をしたって、それこそ教師も俺の事を暇つぶしの玩具か、都合の良い道具としか見ない。

「もし、お家に帰れないのでしたら、せっかくです。私達が相手をしてあげようと思ひまして。」

「流石、佐和さん！お優しいのね。」

「せっかくだから、私もご一緒しますわ！」

でも、俺の睨みはこの女子には何の効果も表さない。

それどころか、金魚のフンみたいに後ろにひつついている他の女子までが便乗し、ざわめき立ち。

まるで逃がさないと言っても言うように、俺の周りはクラスメイトで固められてしまった。

「悪いが・・・」

「あら、何か用事があるのかしら？」

『あなたみたい人間に？』語尾にそう付いていそうな口調で封じられた俺の言葉は、さらに教室のざわめきを強くするだけ。

しまいには、明らかな非難の言葉や、罵声すらが聞こえてくる。

一般人とはこいつ等にとって、同じ人間として見なくていいものと言ええる。

そんな中に強制的に突っ込まれた俺は、不幸でしかない。

もう、今日何度目かも分からないため息を吐いて、俺は満面の笑みを浮かべた。

拒絶を示す、そんな笑みを。

「っ・・・!!」

一瞬にして喧騒を静寂に変える程の笑いは、俺がつい最近身に着いたスキル。

これが結構、役に立つ。

そして、別段大きくせず言葉を発表せば、俺はこの現状から抜け出せるだろう。

「俺には、サンドバックになる趣味も、乱交パーティーっていう高貴なお遊びに対する興味も無いんだ。あー・・・佐和さんだけ？悪いけど、そういうのは俺抜きでやってくれるかな。」

「え、あ。ちょっと!」

「じゃ、また明日。」俺みたいなのを”誘ってくれて、どうもありがとう。」

最後に駄目押しのワンフレーズを付け加え、安堵しながら教室を出て行った。

背中では、貧乏人だとか何だとか、あまり聞いて気持ち良くない言葉がいくつか飛び出していた。

「一般人よりよっぽど、金持ちの方が乱れてると思うけどな。」

背中に豪華な校舎と夕日を背負いながら呟けば、苛立ちは簡単に消える。

(俺で遊んだところで、面白みも何もないと思うけどな。ほんと、無駄な人生経験とスキルだけ増えていく気がする。)

将来なんて、とっくの昔に見えていないというのに。

両親が死んだのが2年前。

俺が中野家に引き取られたのも、2年前。

いつその事、両親や家族と過ごしていた時間全てを忘れていれば、まだ楽だったのかもしれない。

そう思いながら、古びた廃屋敷で紫煙を揺らした。

外は既に真っ暗となっていて、周りは静寂。

ここは中野家からそんなに遠くない、今はお化け屋敷と呼ばれて大人ですら近づかない場所。

この2年間、唯一俺が俺らしくいられる空間でもある。

隣には、小汚い灰皿と吸殻が散らかつていて。

だけど、この屋敷全体が散らかつている為気にすることはない。

誰もいないから、一人で声高らかに笑おうが、嗚咽しながら泣こうが恥らう必要もない。

ただ無心に、延々と煙草を吸う。

俺の毎月の数少ない小遣いは、8割方これで消費されていた。

携帯には何度も何度も、確認の為か秘書の松田さんからの連絡がくる。

その度に、消費する本数が増えていく。

「どっかに軟禁でもした方が、楽なんじゃねえの。」

ブーブーと響くバイブ音に対し、答えるのは自分の笑い声。いつその事、本当にここに幽霊がいて、尚且つ俺を呪い殺すか乗っ取ってくれたほうがお互いのためになりそうだ。

そんな現実逃避とも、自虐的とも捉えられる思いを感じたのか、制服の右胸ポケットから覗くものが目に映った。

生徒手帳。だけど、重要なのはそれじゃない。静かに開けば、出てくるのは古びた一枚の写真。

今は亡き母親と、父親。小学校高学年であろう兄とたぶん小学生に上がる少し前の俺。母に抱かれた妹。

全員が、大きな桜の木の下で笑っている。

「幸せ、か。」

それはきつと、この写真を表す言葉だ。

「あー……めんどくせえな。」

現在いまが引き立たせる過去は、時に残酷だ。

『問題だけは、起こさないようにお願いします。できれば、こちらが連絡した際には出て頂きたいのですが?』

電話と違う短いバイブ音を響かせた携帯には、そんな言葉が並べら

れていた。

ガツン。

そして、次の瞬間には、その携帯は空中を舞い。鈍い音を立てながら落ちる。

「分かってるつつーの。俺が保険である間は、”みんな”幸せなんだろうよ。」

膝を抱えて呟いた言葉はきくと、この廃屋敷の塵の一つとして散っていく。

夏というにはまだ早い季節。でも、肌寒さは感じていなかった。

（「それには、お前も含まれているのか？」）

そんな、頭に直接響くような声を聞くまでは。

1 - 2 電波な俺

「は・・・？やばい。今俺、幻聴聞こえるくらい病んでた・・・。」

ブルリと震えたのは、自分の危なさを感じてだと思った。

どんなに無気力な人間だろうと、堕ちる時には堕ちる。

だからこそこの廃屋敷が俺の楽園であり、現実逃避をしながらも、現実と向き合える時間を作って明日からをまた過ごせるんだ。

なのに幻聴まで聴こえてしまったのは、軽く電波さんになってしまっただろう。

だけど震えたのは、本当に空気が一気に冷えたからだ。額を流れた汗は、危険を感じた体からの警報だった。

（「幻聴ではない。」）

だって、俺の独り言に答える声が再び聞こえたから。

「え、いや。いや、いや、いや、いや！」

こんな間髪入れずの幻聴は、もう幻聴とは言えない。

だけど、慌てて立ち上がり辺りを見回しても写るのは、いつもと変わらない俺の楽園の風景だけだった。

「これはやばい。やばいぞ、樹。お前はそんな子じゃなかったはず

だ。」

（「ほう。お前の名は、樹というのか？」）

ピタリ。3度目にはもう、焦らない自分がいた。

胸の奥で激しく震える鼓動は、緊張からか。それとも、期待からか。自分の事ながら、答えを出すことはできないけれど。

「幻聴じゃ、ない、のか。」

（「当たり前だ。私はしつかりと、存在するぞ。だがまあしかし、今の今までは幻想に近い存在だったかな。」）

たぶん、俺にとっての普通である”異常”であるのは確かだった。だってそうだろう？

会話というのは、通信機器以外では相手がある場においてこそ成り立つ。

なのに、今この場には、俺しかないんだから。

（「樹。お前は、私との対話が可能な程に孤独で満たされている。いや、孤独がお前を形成していると言っても過言では無い。」）

不思議な声は、こっちの気持ちもお構い無しに会話を続けようとしていた。

そして、放たれたモノがあまりにも的を得て過ぎていて苛立つ。

焦り、恐怖、困惑。

そういったものは不思議となかった。

「誰だよ、てめえ。」

ただ、ほんの少し。

実際は苛立ちに隠れて、安堵したんだと思う。

（「私と、契約をしないか？私なら、きっと。お前の気持ちを理解できるだろうよ。」）

的を得た言葉を放てるということは、少なからずその本人も、そういう気持ちを抱いているということだから。

（「その暁には、切れる事の無い絆。裏切りの無い絶対。永遠の信頼が手に入るだろう。」）

俺がそれを望む様に、この謎の声の主も同じ望みがあった。だからこそ、こんなにも明確に断言してくる。

「信頼するから、信頼してくれ」と。

そう気付けば、次に俺を満たしたのは興味と、幼稚すぎる親近感だ。

”契約”という、なんとも不可解な単語は耳を通り抜けてしまっていた。

「その言葉、本当か？」

後に思えば、これは悪魔の囁きでしかなかったんだろう。

甘美で、安易で、切ない囁き。

（「契約とは、誓約。成約は、鎖を結ぶ。裏切りは自身の破壊を産む。お互いが望まない限り、離別は出来ない。」）

「……。」

（「簡単なことだ。お前は、私を探し当てるだけで良い。それだけで、孤独から抜け出せるんだぞ？」）

電気も通ってない荒れた屋敷の暗闇の中。そこに佇む俺。

頭の中で冷静になれと必死に訴えてくる俺と、どうせこれ以上失うモノなんて何も無いんだと誘惑する俺がいる。

（「お前がどうして孤独なのかは知らない。しかし、私も孤独だというのは真実。」）

この時、こいつがもし何か望みを一つだけ叶えてやるから、その代償として自分を解放しろとか契約しろとか言っていたら。

俺はきつと、断っていたと思う。

ただどこいつはとても狡猾で、冷徹で。

的確に俺の中を抉っていた。

そして、運命っていうやつまでもがこいつに味方をする。

「……？」

さつき放り投げた携帯が震え、淡い光を放つ。

見なければよかったのに。俺はこの状況で、少しだけ見えない声を警戒しながらそれを拾い上げた。

「っ！・・・どうすれば、いい？」

（「ほう。」）

カツンと、さつきとは違い静かに携帯を落とす。

力なく呟いた言葉でも、こいつには届くみたいだ。

まあ、当たり前か。

元々こいつは、声を発するというよりは俺だけに伝えてきてるんだから。

俺だけに。

俺、だけが。

（「この屋敷の中に私はいる。お前は、私を見つけ出せ。お前だけが私を見つけ出せるんだ。」）

その声を聞いた瞬間、俺は一心不乱に走り始めた。

携帯にきていたメールは2通。

一通は、兄貴から。

『久しぶり。こっちは皆元気にやってるぞ。お前の方は、ってどうせ豪華な生活送ってるんだろうな！たまには連絡くれないと、お兄

「ちゃん寂しいな？」

俺があそこにいる限から、皆が幸せなんだろう。なんて自己中な考え。だけど、そう思ってしまう。

だって、兄貴達は知らない。

俺がこの2年間で、どんな生活をしてきたかを。どんな視線の中で過ごしてきたのかを。

俺達兄弟を繋いでるのは、携帯だけだから。

きっと、住み込みの使用人の方が良い部屋を宛がわれ、まともな食事をしてるだろう。

それでも俺があそこに居続けてるのは、羨ましがってる兄貴達の為だったりするんだぜ？

年金暮らしの祖父達が苦勞しないよう、俺が保険でいる限り、中野家が資金援助をしてくれてる。

正確には、中野家当主が。

だからといって、この選択しかなかったわけではないのかもしれない。

提示された時、断ることだってきつとできた。

その時の代償はでかかったかもしれないが。

結局は、自分で選んだんだろう。

だとしたら、俺は相当自虐的な人間だ。

だって。

『このまま消えてくれたら手間が省けますが。しかし、ご自分の立場をお忘れにならないように。と、奥様からの伝言です。』

こんなメールを送ってくる冷酷な使用人と、そんな言葉を普通に発する人間に囲まれることを望んだということだから。

葛藤していた俺を追いやったのは、どこまでいっても孤独だった。

1 - 3 上がった炎は始まりの灯火

(違つ・・・。)

埃が舞おうが。

(違つ・・・！)

朽ちた床に足を取られようが。

(違つっ！)

気にせず、屋敷中を走り回った。

扉を開け、部屋を見渡し、そして舌打ち。

それを繰り返すこと早2時間。

俺に科せられたタイムリミットだけが迫り、焦りが募る。

確信なんてものも、確証なんてものもない。

ただ、直感で違つとを感じる。

庭だつたらう場所も見た。

ただの泥水だけが溜まる噴水だった場所になんて、手を突っ込んでみもした。

(くっそ！)

なのに、見つけれない。

「っ、はあ、はあ……。ちきつしょう。」

ずるり、と廊下にしゃがみ込んで荒れた息に隠れて悪態を吐く。

（「軟弱だな。もうバテてしまったのか？」）

「んなわけあるか。闇雲に探すの、止めただけだ。」

なぜなら、粗方探し終えてしまったから。

こいつは、自分がどこにいるのか分からないらしい。ただ、俺なら見つげられるとそう言った。

久しぶりだったんだ。

誰かに頼られる事自体が。

そもそも、こうやってまともに会話したのだっていつ以来だろう。

兄貴達と電話で話すことは俺が避けてきた。

ボロが出てしまいそうで怖かったから。

他の連中は、無関心かお遊びでしか声を掛けてこないから、会話というものがそもそも成立しない。

もしかしたらこいつだって、俺があまりに病みすぎて作り出した幻想だっていう可能性がある。

というか、そうでないと可笑いぐらいだけど。

（「すまない、分かっている。ただ、あまりに嬉しくてな。・・・」

会話するなんて、いつ振りだろうか。」

「フーかお前、一体何なんだよ。」

どンドン冷静になっていけば、端に追いやられていた疑問が幾つも出てきた。

頭の中で、今まで見てきた屋敷のどこかに違和感がないか探りながら、それでいて静寂が嫌だからと話を振る。

（「私か？さあ、自分でも分からないな。」）

（たぶん、はぐらかしてるんだろうな・・・。）

はあ、と何に対してか分からないため息を吐きながら煙草を吸う。点でしかないオレンジの光を見つめながら、ふと湧き出た自分のアホさを笑った。

（「どうした？」）

「いや。俺、ほんと無関心っていうか、無気力だったんだと思っただけだよ。」

2年間、この場所に通いながら何の疑問も感じてなかったこととか。幻想にしるなんにしる、自分の闇に何の対策もしなかったこととか。

こんな、ただの煙で誤魔化してきた餓鬼さ加減とか。

こうやって必死に何かをしてみても気付いた。

ここは、中野家に近い場所。つまりは、高級住宅街だ。

そんな金持ちばかりな連中が、こんな廃屋敷の存在を許すわけがない。

なのに、この2年間ここは当たり前のように存在していた。

俺以外の誰も足を踏み入れてない、それこそ見えてないんじゃないかと感じる程に。

（考える。可笑しくない場所が可笑しいんだ。）

携帯の充電は今にも切れそうで、そう長くはライトとして使えない。それ以前に、もう少して俺はあの牢獄へ帰らなきゃいけない。

こんなチャンス、2度と訪れないだろう。

こんな、非現実的な出来事なんて。

「・・・あ。」

そして、不意に感じた違和感。

ジリジリと、フィルターが焼ける音がした。

（「いい加減、待ちくたびれたぞ。」）

「うつさい。分かってるっつーのっ!」

煙草を床に投げて踏みつけ走り出した俺に、そいつは毒を吐く。

何度も躓きながら、俺はさつき感じた違和感の場所へと向かった。

そして辿り着いたのが、1階の、元は書斎だったろう場所。

息が上がってるから、こんなにも心臓が脈打ってるんだろうか。それとも、緊張しているのか。

理由がわからないまま胸を押さえ、ゆっくりとある物の前に立つ。そこにあっただのは、本棚だった。

高級そうな作りで、静かに佇んでいる。

一冊の本も落とさず、ここだけ時間が止まっているかのように朽ちることもなく。

それが、違和感の正体だった。

そのまま、必死に並んでいる本一冊一冊を視線に捉え、流していく。

「はぁ・・・っはぁ・・・っ。」

自分の荒い息遣いと鼓動の音だけが耳に響く。まるでこれが、俺にとって最後の希望のよう。

まだ16年しか生きてないくせに、どんだけ悲観ぶってんだよって感じだよな。

（だけど・・・。）

手が自然と一冊の本に伸びる。吸い込まれるように。

「もう、一人はこりこりだ。」

（「・・・そうだな。私もだ。」）

手に取った本は重く、開いたページには見開きで魔法陣のようなものが書かれていた。

色あせているインクが、年季を感じさせた。

「おい、なんか魔方陣みたいなのが書いてる本があるんだけど。」

（「それを燃やせ。」）

簡単で、簡潔。

たぶん、笑っているんだろう。

そう思わせる声だった。

「・・・。」

（「ほら、どうした？」）

左手に本、右手にはライター。

親指に力を入れるだけできつと、この本は燃えると思う。

だけど、今になって、頭の中の冷静な俺が躊躇させる。

こんなの、馬鹿げてるって。

（「樹となら、分かりあえると思ったんだがな。だが、仕方がない。怖いのならやめても良い。なに、少しの時間でも一人じゃなくなつたのだ。十分、安らげた。」）

「っ！」

ほんと、こいつはずるくて正直で。
強いくせに、強がりだ。

「ばーか。からかっただけだよ！」

だから俺は、この先、お前の前に立とうと思ったんだ。
ずっとずっと、先の話だけだ。

親指の軽い一押しで、本は簡単に燃え始めた。

そして俺は、
- - を知る。

1 - 4 つつこみ講座初級編

「ふははははは！」

ライターから本に移った炎は、オレンジから青へと変化しながら強さを増した。

あまりの熱さに手を離すが、炎の塊となった本は床に落ちることなく、しかも揺らめく炎はまるで顔のように見える。

それは声と同じく、笑っていた。

その瞬間、やっぱりかと思ってしまう。

「はっ、馬っ鹿みてー。」

俺も笑った。俺自身に呆れて。

加えて、本がその姿を消していく変わりに、さっきまで激しく鼓動していた胸が疼く。

いや、疼くってもんじゃない。

だんだんと、痛みとなって俺を襲う。

「孤独を抱えてる者は、やはり扱いやすい。なあ、樹？」

頭に響いていた声は、今ではしっかりと耳から伝わってきていた。

目の前の炎は、ニヤリとそれはそれは楽しそうに笑う。晒う。

非現実的なことには変わらない。

だけど、その表情は俺にとっての日常の中で良く見かけるものだった。

馬鹿にして。見下して。そうやって嘲笑う周囲と同じ。

必死に、探してやったっていうのに。

あんなにも寂しそうに、安らげたとかほざいてたくせにな。

「っ……、糞野郎が。」

痛むのはきつと、胸だけじゃなかった。

「だが私は嘘は付かない。一緒にはいてやるさ。いや、いてくれなきゃ困るんだよ。」

青い炎はそれから、ぎゅんっという効果音が付きそつな感じで急に蠢いて俺の目の前に伸びた。

近いし、熱いし、不気味だし、髪が焦げたし。

（ほんと、ふんだりけつたりだ。）

確かに今日は、いつもの倍以上ため息を吐いた。

いつにも増して運が悪かったし、気分も曇ってた。

（だからって、幸せ逃げすぎだろ…。）

ジリジリと俺を焼く奴と、胸を襲う激痛。

もう対処しようと思わず、委ねようと思う。

「我が名はルディウス。さあ、樹。契約だ。」

(楽しそうで、なによりですよ。)

声も出すことが出来ず、蹲って痛みを耐え、額には脂汗が滲む。

それすら億劫になり、そのまま身体を埃だらけの床に横たえれば、正体も知らない炎から手が伸びた。

「潔いな。見つけたのが樹で本当によかった。はは、私はラッキーだ。」

最早俺は目を閉じて、一方的な会話を聴くだけだ。

そうして、たぶん炎は手を俺の胸に当てた。

「っ……!!」

「安心しろ、直ぐ終わる。殺したりはしないからな。」

体内の血液が沸騰している気がする。

瞼の裏に映るのは、真っ暗闇だ。

目を瞑っているんだから当然だが、その中にちらちらと青い炎が現れ、奥に俺が笑っている様子が映った感じがした。

まだ、何色にも染まっていない俺。

本当の、俺。

失った記憶を取り戻したいとは、不思議とあまり思わない。

だけど、染まってしまった俺の元の姿にはどうしてかホツとする。

(あー…、我ながら可愛いぞ。)

ひさしぶりにふつと笑えた。

と同時に、全身の激痛が徐々に引いていく。

「契りは交わされた。この先樹は、私の従者だ。よろしくな?」

上手い話には裏がある。

安堵の吐息に混ざって、俺は本日何度目かの悲観のため息を吐いた。

従者って、あれだよな。様は下僕ってことか。

思わず、某学園モノのアニメの主人公が良く言うセリフを叫びかける。

それをぐつと飲み込んで、諦めを含んで固く閉じていた瞳を開ければ、熱く揺らめいていた炎が収縮していく。

さらには、唐突にボンッと気の抜ける音がして白い煙が小さな部屋に充満した。

「やっと、封印が解けた! さあ、いちゅ…いちゅ…っ! いちゅき!」

「……さて、帰ろ。」

その煙はすぐに消えて無くなったが、俺はその瞬間現実逃避をした。

ほんと、今更ながら現実逃避をしないとやっていけないと思った。

「にらー！いちゅっ、い…つき！つき！私を無視するな！」

え、何故かって？

そりゃ、あー…、えーっと、うん。

煙が晴れた時、俺の目の前には、さっきまでの謎の声や炎との対峙で感じた緊張感とは程遠い、幼稚園児ぐらいの餓鬼がいたからです。はい。

しかも、口調は偉そうで、さっきまで聴いていたのと同じに思えるけど、なにせ「いつき」が発音できていない。

最初は、噛んだのにあたかも噛んでませんと言いたげにゴリ押しし、たし、二度目には諦めて略しやがった。

「そうか、チビ。悪戯すんのは楽しかったか。けどな、あんまり人様に迷惑かけるんじゃないぞ？俺だったら、たまには遊んでやるから。だからほら、いい加減夜も遅い。さっさと帰らないと、今頃家の人達が心配してるから、な？」

俺だって馬鹿じゃないから、この餓鬼が今まで俺に不思議体験をさせてきた張本人だって分かってる。

だけど、頭で理解していても納得できないことって山ほどあるだろ？

そういう時はとぼけるに限る。うん、これ俺が今までの人生で培ってきた経験だから、参考にしてくれても構わないぞ。

早口にそう捲くし立て、餓鬼に視線を合わせる為にしゃがんで、偉く綺麗な漆黒の髪をぐりぐりと撫でた。

…今なんか、手にコツンと固いものが当たったが無視しておこう。
視界には映って無いから、気のせいだ。気のせい。

「お前、今までの流れ全部無視するのか！さっきまでの声も、炎も、私だ私！つきは契約で、私のじゅーしゃになっただんどぞ！だから、うまやえ！」

「おいしい。従者に敬え、だな。」

「っ！~~~~っ！」

思わずつつこみが出てしまい、しまったと慌てて口に手を当てる。すると餓鬼は、みるみるうちに顔を真っ赤にさせていった。

うん、開いた口から覗く八重歯が、異様に鋭く尖っているのも気のせいだなきつと。

「ようし、分かった。とぼけりゆつもりなら、お仕置きだ！しっかり教育するのも、ご主人様のちゆとめだからな！はっはっは！」

「そうかそうか。じゃ、また遊ぼうな。」

つつこめるなら、つつこみたかった。

2度も噛んだし、本人は「はっはっは」と笑ってるつもりだが、「きゃっきゃっきゃ」にしか聞こえない。

だけど、これまた漆黒の綺麗で大きな目がニタリと怪しげに笑っている。

不穏な空気を敏感に察知した俺は、あくまで普通を装って右手をシユタツと上げて立ち上がり、入り口に向けてダッシュした。

「あみやいわ！」

「ぐっ！」

つもりだったが、予想は的中し、俺は見えない何かに押しつぶされた。

さらに、背中に小さな足が乗り。

俺は屈辱に呻く。

それを至極の笑みで見下ろす餓鬼は、餓鬼でありながら餓鬼じゃなかった。

「改めて、名乗ろう。私はルディウス・ド・シルベッティ。しょーしんしょーめい、それでいて最強の魔王だ。」

「…不幸すぎる、俺。」

それを聞いた途端、俺はさっきはぎりぎりでご慢した台詞を思わず咳く。

そして、本日最大のため息を吐いたのだった。

自分の事を魔王だと言いつつ餓鬼は、俺を足蹴にしたまま言った。

「私は元々、こちら側の者じゃない。しかし、色々あって封印され、力を奪われてしまった。しかーし、つきのお陰でこうして復活を遂げたのだ。」

「だったら、さっさと自分の世界に戻ってクダサイ。」

当たり前前に俺は答える。だけど、餓鬼はそうしたいのは山々だが、と呟いた。

「今の私は、人間と対して変わらない。だからこそ、契約だ。」

(ああ、これまた不穏な雰囲気ですよつと)

ふふんと、さも得意げに告げる餓鬼、ああルディウスだっけか。

いや、やっぱ餓鬼のまんまでいいか。

餓鬼は、ぐりぐりと足を動かしながら、呻く俺にさらなるダメージを与えようとしていた。

「奪われた力を取り戻すため、つきに手伝いをしてもらうのだ。」

「断る。俺忙しい。つーか、体力も無いし頭も平凡だし、金はあるにはあるけど、俺に使う権利はないしな。あー、それに学校もあるし……」

「断るだろうな、とは思ってたさ。しかし、それを1年以内に全て取り戻さなければつきの命は付きるとしても、か？ちなみに、奪われた力はキリ良く5つに分けられて、この世界散り散りになっているぞ。」

ピシリ。

ああ、今の亀裂は俺の堪忍袋なのかはたまた人生が崩れたただの塵となる前兆なのか。

とにかく、だ。

神様よ。いや、ゴットよ。むしろジーザス。

(俺、あんたの勘に触ること、何かしましたか?)

思ったのは何で俺ばっかという想いだけで、余命1年にされてしまったことへの憤りは沸かなかった。

「あー、やだやだ。」

「む?」

というか俺に、未練なんてものはない。

何て寂しい奴なんだと自分でも思うけど、頑張るとか努力とかそういうったものは、俺には何の意味もないんだから仕方ないだろ?

唐突に笑えてきて、なんかよくわかんない力に邪魔されながらも、うつ伏せのまま背中小さな足を手で払った。突然の俺の抵抗に、餓鬼は驚いていた。

「俺に何か求めたって意味ねーの。頑張るとか何かするとか、めんどくさくてやってらんね。さっきのお前を探す力が俺の限界。つかあれが、俺の一生分の頑張り。もうストック0なの。分かった？分かったなら他当たれよ。」

やさぐれとも思われる土豪に放った言葉。一気に喋りすぎて軽く息切れだ。

「1年後に死ぬとしても、か？死ぬには聊か早過ぎる年だろ？」

餓鬼は少し困惑したみたいだ。

動揺しない俺に。頷かない俺に。

「別に。でもそうだな、不安なことっていえば、それで死ぬ時って苦しいのか？というか、不信な感じで死ぬのか？」

「え、いや…」

そして、俺の若干ずれた質問に戸惑いつつも考え込む。その間にゆっくりと身体を起こした。良い加減、この不思議な重みをなくして欲しいんですけど。

よっこいしょと親父臭い動作で起き上がると同時に、餓鬼が顔を上げる。さっきまでの威勢の良さが打って変わって、その表情は自信

なさげだ。

「たぶん、電池が切れたように死ぬんじゃないか？」

小さな口からでた言葉もまた、当てずっぽうにしか聞こえなかった。

「はは、そうかよ。」

またでた笑い。俺は悟った。

これは、神様がくれた贈り物なんだと。やっときた幸せな出来事なんだと。

(神様って、やっぱり残酷なんだな。)

「何がおかしい？」

立てた膝に腕を力なく乗せ、天井を仰ぐ。

餓鬼が一丁前に怪訝な顔するなつての。

「だったら尚更、俺には好都合だからだよ。」

なんたつて俺は、保険なんだ。お前は知らないんだけどさ。

そして俺は保険として使われた時、きつと何もかもを失い、終わりを望むだろう。その保険が使われるとしたら、来年。

1年後だ。

「つき…お前…」

「だから、契約解消した方がいいぞ。」

にこりと笑えたのは多分、自分がどんな顔をしようとしたのか分かりたくなかったからだと思う。

そんな俺に、餓鬼は突然顔を真っ赤にさせた。

「嫌だ！」

「…は？」

フリーズ。うん、フリーズ。

「お前じゃなきゃ嫌だ！私が決めたんだ、つきは黙って俺に従えばいいんだ！」

お、おお。何て俺様ゼリフ。けども駄々子。そりゃもう、足をばたばた、手をぶんぶん。

「うっお！」

しかも、何か変な空気砲みたいなのまで飛んで来た。待って、落ち着けて！

「とにかく、つき！」

「お、おう？」

若干シリアスだったマイワールドを圧倒するほどの餓鬼の駄々。ずびしと指を指されて思わず返事をすれば、漆黒の瞳はぎらりと光った。

「お前は私の僕だ！」

「どうやら俺の余命は後1年で確定したようです。」

2 - 1 黒糖飴が最終兵器

「ルディウス、お前いい加減にしろってまじで！」

「つきが悪いのだ。私を無視するから！」

例の餓鬼と出会ってから1週間が経った。

その間の変化といえば、餓鬼をルディウスと呼ぶようになったこと。

んで、今居るのは学校の屋上だ。

そしてただ今絶賛口論中。

理由？それがですよ聞いてください。ていつか聞け。

「だからってお前、教室で騒がれても俺しか見えないんだからな？俺がまるで頭がおかしい奴みたいになるだろう！」

学生な俺は学校に通うのが性分だ。つつても適度にさぼってるけどさ。

当然、ルディウスは留守番させるつもりだった。

だけど、あるうことかこいつは学校にまで付いて来ると言い出して。

勿論、拒否した。

子連れで学校行けるかあほ！

しかし、そんな心配は無用だと高笑いされた。力を失っている今の状態だと、人間には俺かもしくは素質のある奴しか見えないんだと。だからまあ、家にいさせられてただけだ。

それでも嫌なもんは嫌だと最終的に全力で拒否ってやったら、空気が砲が飛んできて激しく玉砕。

まあ、ここまではまだいいんだ。問題はその先。

着いて来たとしても、俺は相手ができない。授業中は静かにしなきゃいけないだろ？

最初はよかつたんだ最初は。学校を探検したり、膝の上（超不本意）で読書したり。（これまたえらい難しいのを読んで眩暈がした。）
だけど如何せんお子ちゃまだ。午前中すらもたない。後半はもう、俺に対しておもしろそうにちよっかいをだしまくるんだこれが。しかも、抵抗できないって分かってやってるから性質が悪い。

結果、俺はなんとか午前中をのりきった。だけど、無理。もう限界。午後まで耐え切る自信が欠片もない。ていうか俺、よく初日でキブアップしなかつたな。

忍耐力なさすぎと呆れられてもいい。俺にしては、学校に連れてきた1日目ですうならなかつたことが奇跡すぎる。

「はっ！みたいだとは笑わせるな。つきは、おかしいじゃないか。」

（こい つ！鼻で笑い飛ばしやがった！）

「もう、いい。好きにしてくれ。」

怒りが沸きまくりながらも、それをぶつける気力が残ってなかった

俺は、けたけた笑うルディウスの横でがっくりと頂垂れ大きく溜め息を吐くので精一杯だった。

ああ、こいつといると、数少ないHPがヒットポイントすぐに瀕死に追い込まれるよ。

「ほら、取りあえずこれ食っとけ。」

とにかくもう、とりあえず回復させてくれ。

そう思い、静かにして欲しくて常備している飴をあげようとする。

「お前はまたそれか。」

だけど、途端に渋い顔になるもんだからおもしろい。ルディウスはころころと表情が変わる。俺にはできない芸当だ。

「黒糖をばかにするなー？俺はこれがないきゃ死ねるぞ。」

主に栄養失調で、とは言わない。

ルディウスはもう、俺の立場と生活環境を知っている。

そして、憤慨してくれた。

分かるまでの間は、俺がやれば当たり前前のように受け取っていた食べ物も、絶対に受け取るうとしなくなった。例え、飴玉一つであるうとも。

「今の封印が解けきっていない状態の間は、別に食べずとも死なない。そもそも魔王にとって食事とは、嗜好でしかないしな。」

そう言つて、しかしお前はと怒鳴り。

「城の使用人でも、もっとましなものを食つてる!」

と、ちよつと聞きたくなかつた単語も入りながら憤つて。

「いつその事呪い殺してしまおうか…。」

と、俺の身を案じてくれた。勿論止めたけどさ。

「また昼を抜くのか。」

「月末だからな。」

「煙草なんて吸うからだ!」

コンクリの上に横になつてる俺の隣でちよこんと座るルディウスに頭を叩かれ、だから辞めただろと言えば当然だとまた怒られる。

「ちよつと待つてる。」

そして徐に立ち上がり、飴玉を口の中で転がす俺の傍を離れた。

「どこに行くんだ?」

特に引き止めるつもりもなく聞けば、ルディウスは口角を少し上げてニヒルに笑つた。おお、魔王っぽいぞ。

「ここには馬鹿な奴しかいないからな。少しぐらい無くなつても、連中には端金だろう?」

それは立派な犯罪ですよ」という言葉の変わりに手をひらひら振れば、ルディウスはトコトコと消えていった。

良い気はしないが、それで腹が満たされるなら文句はいえない。

もう3日ぐらいまともに食べてないからな。

育ち盛りには地獄すぎる。

にしても。

「馬鹿しかいないって、俺も含まれてるのかよ。」

そこはちょっと、勘弁したいよご主人様。

(あー、青いなあ。)

空を見上げながら、ファンタジーな世界に慣れてきた自分を感じただけど、これはただの序章にすぎないなんて。

感覚が大分麻痺してる俺には、気付くってほうが無理だったのかも
しれない。

2 - 2 思春期してるか少年達！

昼休みの終了を告げるチャイムが響く中、俺は未だに屋上で寝っ転がっていた。

「あのやろっ、ぬか喜びさせやがって。」

屋上には、チャイムに加えて腹の虫が泣く音が混ざる。

鳴くじゃなくて泣く、で合ってるからね俺の場合。

ルディウスはあれっきり、戻ってくる気配がない。

かく言う俺も、未だにHPを回復中。動く気なんてさらさらございませぬ。

だからただぼーっと、空を眺める。そのまま、目を瞑ってまどろんでいた。

そうして暫くすると授業が始まり、教師の声が聞こえてくる。

「あらやだ、美味しそうな子がいるわね。」

時たま、聞いてはいけないような会話も。にしても、エロい声だな
！。

「少し痩せすぎな気もするけど、まあ若いから元気よねきつと。」

おお、これはもしや、美人保険医と生徒のアレですか。
ありがちな展開ですか！

「ていうか、綺麗な顔してるわねえ。これであっちも良い感じだったら最高だわ。」

うんうん。若いうちに色々経験してみるのは良い事だ。ただし、学校にはばれない様にもちつと気を付けた方がいいかもなあ。そもそも、窓を開けっばで事に望もうなんてがつつきすぎだろ。

なんて微笑ましく聞いていると、ふと気付いた。

（保険医じいじやねーか。しかもあんな若い教師いなかったはず。え、生徒か？いやでも、だったら若いからとか言わねーよな。）

「あーもう、もろにタイプ！今が夜だったらいいのに。」

違和感はもうひとつあった。

その声は、間近でしていた。

睡眠欲求よりも探究心の方が上回り、ぱちりと目を開ける。

視界に映ったのは、青い空ではなくぱつさりと長い睫。

「え？」

「あじ？」

素っ頓狂な声を上げた俺に、それは同じく驚いたように声を上げた。あまりに顔が近すぎて、ビクツとなりながら後ずさる。

向こうは俺を凝視したまま動かない。俺も、動けなくなった。

気まずい静寂。視線をさ迷わせて誤魔化そうとしたけど、突き刺すような相手の視線にそれもできない。

遠くからは、教師の流暢な英語が聞こえるけど、まるでここだけが別世界みたいだった。

いや、実際別世界だろう。

だって。

「あんだ、あたしが見えるんだ？」

ニヤリ。

真っ赤で妖艶な唇をしたソイツは、どこをどう見ても人間じゃなかった。

腰までの長い髪と瞳は、血より赤そう。俺の顔を覗き込んでいたからか、四つん這いの姿勢で強調されている魅惑的な腰と臀部の後ろでは、ゆらゆらと槍みたいに先が尖った鍵尻尾が揺れている。

全身も、豊満な胸の露出しちゃいけない部分や下半身が真っ黒な毛皮みたいなので覆われているだけだ。あれは絶対服じゃない、デフォルトだ。コスプレでもない。

「うふ。今日のあたしは、相当ついてるみたいね。」

そう嬉しそうに発した口からも、人間には到底ありえない鋭さの牙がのぞく。ルディウスよりも鋭くて、それはどう見ても凶器。

(あゝ、もう、こんちきしょう！)

誰にぶつければいいのかわからない苛立ちを押し込めようと心の中で悪態を吐いている間も、まるで獲物を前にした肉食動物のように舌なめずりをしていた。

その姿に、ぞくりと身震いする。身体が危険信号を発する。たぶん、命よりも貞操の危機を察して。

「夜ならまだしも、こんな真昼間にあたしの事が見える人間なんて、一生の内に会えるかどうか分からないもの。」

おいおいおい。

俺っていつの間に、そんなレアな奴になったんだ。

そしてあなたは何ですか。

思わず頭を抱えてしまう。

こうして悩んでいる間にも、んふふと笑いながらセクシー露出狂美女(今命名)は俺の方へ四つん這いのまま迫ってきていた。

一歩近づいてこれば、俺が一歩下がる。

しばらくそうして逃げていたけど、すぐに背中がフェンスへとぶち当たった。

ついでに、自分がレアになった理由も悟る。

「ねえ、坊や。このお姉さんと契約しない？そしたら毎日、あゝん

てたなこいつ。

でも、その甲斐あつてか見事にベストタイミングだ。きゃーかっこのいいー、ぐらい言つてやるべきかも。

ただ、残念なことに見た目はどうしたつて餓鬼だ。

その姿で扉にもたれかかつて偉そうに格好つけたとしても。

「ぶっ、笑える。」

思わず噴出せば、ぎろりと睨まれた。

ひい、射殺される！

「あーら、陛下。もしかして、この子つて陛下の？」

止まっていた指先がつつと俺の顎を持ち上げた。

(いいから早く、俺を解放してくれよ。)

ゾクツと背筋が凍る様な雰囲気は、俺のいない所で出し合ってくれ。

そう願ひ、ルディウスに目配せをした。

勿論、通じると念じるのも忘れない。

「そつだ。」

「なら、尚更欲しいわ〜。」

だめだ。

こいつら、巻き込む気満々だ。

(ていうか、仲間いんなら力探しはそっちに頼めよ！)

ルディウスについては、自称魔王ということしか知らない。後、確実に人間じゃないってことか。

だから、交わされる2人の会話は分からない単語ばかりで、むしろ耳に入らないようにした。

そのせいか？

ルディウスの表情が、普段と違っていていることに気付く。

(あいつ、何で焦ってた？)

視線がせわしなく、屋上全体を見回している。扉から一步も動かない。

眉間には皺を寄せ、まるで隙を窺っているような。

(までよ？…うそだろ、おい。)

そこで浮かんだ、1つの予測。

一瞬で、これまでのルディウスとの会話を辿る。そこから素早く要点を絞り出す。

封印、契約、俺の必要性。魔王、餓鬼の形^{なり}。

- - 力の、喪失。

俺にとってはあの空気砲だけでも充実脅威だけど、仮にルディウスが最強だったとして現状あれが精一杯だとしたら。

そして、その力を奪えるところ？

答えなんて、分かりきっている。

その考え自体は、俺の周りにも溢れてるじゃないか。

陥れ、蹴落とし、奪い取る。

ルディウスは、こちら側の者じゃないといていた。

だけど、セクシー露出狂美女はその存在を知っている。

と、すれば、ルディウスはこっちでも有名なのか、もしくは追いかけてきていたか。

こちら辺は予想でしかないけど、どっちにしろ頼ろうとしないところからして。

「走れ！」

「やっぱり敵かー！」

「きゃあっ！！」

それぞれの反応はばらばらで、ルディウスはあの空気砲を突然ぶっぱなし、俺はその行動で考えていたことが当たっていたことに思わず叫び、んでセクシー露出狂美女は油断していたのか空気砲をもろに受けて悲鳴を上げながら吹っ飛んだ。

呆然としそうになりながら慌てて立ち上がりルディウスの方に掛ければ、間を置かず叫ばれる。

「そのまま走って逃げる！」

「お前はどーすんだよ！」

後ろでは、いたたたたと美女（長くてもう美女でいい）が起き上がっている感じの音がしていた。

「私はこの淫魔サキユバスと話をしなければならぬからな。」

やっぱりか。

たぶんそう言うだろうなと予想はしていた。

かなりオブラートに包んだ言い回しをしたのは意外だったけど、雰囲気からしてその話合いとは決して穏便ではないだろう。だから、聞いた途端走りながら器用にため息を吐く。

「も〜、頭きた！」

美女改めサキユバスはお怒りなご様子。ビシッと地面を何かで打ち付ける音もした。

振り向かなくても分かる。鞭だ！むしろ、鞭じゃなきゃ嫌だ！

とまあ、余裕ぶっこいている様に思える俺は、内心頭を働かせるので忙しかった。

余裕？ふざけんな。

サキユバスとか、どこのRPGですか。

俺は、俺しか持ってない。

それだけだ。

だから、自分で動く。

自分の為に、だ。

そして、丁度ルディウスの横に辿り着いた時、この状況から脱するプランが組み上がった。

「気にせず行け！」

「ふっざけんなー！！」

戦略的撤退。名付けて、誘拐犯じゃありません！プラン。

俺を置いてお前は逃げる発言をしたルディウスを、ノンストップで小脇に抱え、啞然とするサキュバスを屋上に残し、俺は階段をそれこそ転がるように駆け下りた。

勝手に死亡フラグたてんじゃねーよ！巻き込まれたらどーすんだ！

2 - 3 悪知恵だけが取り柄です

「つき、下ろせ。……………つき！」

「うるせえ、黙ってる。舌嚙むぞ。」

叫び暴れるルディウスを抱え、どんどん階を下りていく。

勿論、この後のプランに落ち度は無いか探りながらだ。ただ、その奥で小さかった怒りが徐々に膨らんでいく。

「あの淫魔を放っておけば、もっとやっかいになるんだ！私は大丈夫だから、いい加減下ろせ！」

尚も騒ぐルディウスを無視し、俺は目的の場所の前に辿り着いた。そこは、俺のいるクラスの教室の扉の前。なぜここに、と訝しげな顔をするルディウスを地面へと下ろせば、小さな口はこの好機を逃すまいと開いた。

「私は、」

「……で待ってる。」

でもそれは、俺の言葉に一蹴りされる。皆まで言わせるか！

「しかし、」

「いいな、待ってる。そこから一步も動かず黙って待ってる。」

生憎俺は、久しぶりに怒ってるんだ。手加減無しに睨んでやれば、それこそ「ぴっ！」と変な悲鳴を上げて固まっていた。

それを確認してから、がらっと扉を開ける。

勿論室内は授業中で静まりかえっていたから、普段以上に大きな音で響く。全員の視線が俺へと集中する中、足は教卓へと向かった。

「失礼します。授業中に申し訳ありません。」

教師の前まで来て深々と頭を下げれば、日常で向けられる嫌な視線を全身に浴びせられる。

今日の俺はとことん最悪な運なのか。今は数学の授業中だった。教師は普段から俺を蔑む嫌な野郎だ。

数学教師はごほんと咳をして、あからさまな音を立てて教卓に教科書を置いている。

「遅刻とは良い度胸をしているね。君は、私の授業を受ける気が無いのか？」

自分が有名私立高校の教師をしていることを、何よりも自慢に思っているんだろう。予想通りの言葉に聞こえないよう内心でチツと舌打ちしてから顔を上げる。

おーおー、いかにも私は真面目ですって感じの眼鏡をクイっと上げ

て睨んでくれて。ご苦労な事ですよ。
そう毒吐きながら、用意していた言葉を発した。

「すみません。体調が芳しくなかったので保健室で休ませてもらっていたのですが、保険医の先生が今日は早退した方が言いとおっしゃって。」

「そんな連絡は受けていないし、早退届けも持っていないようだが？」

めんどくさいとは思うが、予想していた言葉しか口にできない教師が可笑しくも思う。

そんなものの切り替えしなんて、簡単なんだよ。それよりも、待たせているルディウスの方が気になる。

これでさっきの言葉を守ってなかったらどうしてくれようか。

あからさまに蔑みの目を向け続ける教師に対し、俺は少し首を傾げて眉を下げた。

後ろで聞こえるクスクス笑いは、無視だ無視。

「そう、ですか。どうしよう、困ったな。保険医の先生が連絡を入れて早退届けは出しておいてくれるという話だったので、もう家に連絡を入れて迎えを呼んでしまつて。到着の連絡を受けたので、出きるだけ早く下に行かなければならないんです。なんでも、お爺様をお迎えに行こうとしていた時に僕が連絡をいれてしまつて。それを耳にしたお爺様が、お忙しいにも関わらず体調を崩しているのならば、お待たせしてしまつている状態なんです。」

邪魔を許さない口調で一気に捲くし立てた言葉は、勿論嘘だ。
ポイントは、控えめに困惑した表情を作るところ。

案の定、前半はためえ立場を弁えやがれって感じの顔をしていた教師が、お爺様というフレーズを聞いた途端恐れ慄く素振りを見せた。ついでを言えば、クラス全体が凍りつく。そして、生徒全員が教師の動きを伺い始めていた。

お爺様。この言葉の力は本当に偉大だ。

俺の家での立場がどんなものなのかは、皮肉な事に同学年に在席する叔父の末の息子が親切にも全校生徒に伝えてくれている。

だから、他の金持ちをも黙らせる名家に所属しながら見下されているわけなんだけど。

だけど、それが出来るのはお爺様にそのことが伝わらないからだ。

基本的にあの人は、自分の利益以外に関心が無いからな。

逆を言えば、中野家当主であるあの人の怒りを買ってしまえば、もう社交界では生きていけない。

そのお爺様を待たせていると言った今の状況で、この教師は俺が早退するのを許す以外に選択肢は無い。

「……ならば仕方が無いな。早く用意をして出て行きなさい。」

ふっ、勝った。しかも、保険医は物忘れが激しいじいちゃんだからな。この後わざわざ確認を取るなんて面倒なことしないだろう。

許しが出たらもう、お礼もそこそこに自分の席の荷物をまとめて教室を後にする。

仕方ないから、一礼だけは忘れずに。じゃないと、明日からの嫌味がめんどい。

そして、背中扉を閉めた瞬間、言いつけを守っていたルディウスが言葉での猛攻撃を始める前に再び小脇に抱えてダッシュ。

「走りにくいから抱えてる！」

「づう〜ぎい〜！」

再び小脇に抱えられ、尚且つ鞆まで押し付けられるとは思っていなかったのか、若しくは俺の足の速さがさつき以上に増したのに驚いたのか、ルディウスの上げたぐえつという悲鳴は空しく廊下に響いた。

仕方ねーだろ！視界に鬼の形相なサキユバスが映ったんだから！いくら美人でもあの顔はねーわ。むしろ美人だから怖さ倍増だわ。

ルディウスも気付いたのか、ひつと息を呑む。

華麗な動きで靴を履き替えだっ広い校門までの道を駆け抜けながら、恐怖以上の怒りをどう処理しようかと、俺は青ざめるルディウスを見る。

相手の行動が読めるくらい同じ時間を過ごすなんて、一体いつ振りなんだろうか。

記憶の中には何故か、今は亡き両親と兄弟との思い出しかない。気付いていたのか、それとも蓋をしていたのか。

初めて俺は、自分という存在に違和感を覚えた。開いた扉は、一つではなかったのかもしれない。

2 - 4 むしろ蛙に睨まれた蛇

「餓鬼は黙って言う事聞いとけ！」

雲一つ無い晴天。その昼下がりに。

その穏やかな時間に、無駄にトゲトゲしてて当たったら確実に肉抉られるだろって思う危ない鞭を手にするサキュバスを目の前に俺は、ルディウスに声の限り容赦なく怒鳴る。

怒鳴られるのに慣れていないのか、それとも怒鳴ると思ってなかったのか。

息を呑んで固まるルディウスからサキュバスに向き直り、手に持つ鉄パイプを握る力を強めた。

サキュバスは目を輝かせながら、心底楽しそうに笑う。

身体を襲う緊張感は、確実に危険で異常を知らせていた。

「や、ばい。あれは、ヤバい！けど、腹減りすぎて力でねえ。てめえが期待させたからだぞ、こんちきしょう！」

「なっ…仕方ないだろう！その後すぐに、あのサキュバスに見つか

「つたんだから！」

見つかんじゃねえよという切ない願望の言葉は、儂く風に浚われていく。

頭から離れない鬼の形相のせいで後ろを振り返ることができないが、俺達は未だにサキユバスに追いかけていた。

学校を出てから右へ左へ、とにかく人の居ない場所を探しているが、無情にも天は美女の味方だ。

さつきから、全力疾走する俺に、すれ違う通行人の奇異の目線が突き刺さる。

きつとみんな、『どうしたんだろうあの子。まるで何かに追われている様な…。』的なこと思ってるんだ。

そうです、見た目は美女だけど鬼に追われてるんです！

ついでに言えば、分かっています。誰もそんなこと思っていないだろうなってことぐらい！

でも、そうでも思わなきゃ、空腹で今にも力尽きちゃう。

「で、てめえは何で追われてるんだ！？」

味の向こう側ならぬ空腹の向こう側に到達出来る事を願いながら、それでもこの鬼ごっこが少なからず俺に時間をくれたのは確かだった。

ただし、走りながらの会話は余計に体力を消費するから諸刃の剣だ。

「……大方、私の力を欲したんだろうさ。何せ私は魔王だからな。」
ああ、人は余裕があつてこそ何ぼだと思う。つまり、余裕のない俺の沸点はかなり低くなっているようだ。

(聞きたいのはんなことじゃねえんだよ、クソガキがつ！)

恐らくルディウスははぐらかしたかつたんだろう。普段の俺なら、そんなこと余裕で分かる。だけど、今の状況だと馬鹿にされているだけに感じた。

俺は自慢でも捻くれてでもなく、純粹に希望は持たない。何故なら、それが俺にとつて無意味だと分かっているからだ。ただ、だからこそ現状維持を心がけている。そして、今を壊されるのだけは無視できない。

なのにその破壊が、ルディウスが原因で起ろうとしている。
それに巻き込まれているんだから、必要なことをはぐらかすのはルール違反だろ。」

とうとう、爆発した。

「馬鹿にするのも大概にしろよ。仮にてめえが、その最強の魔王様だったとしても、俺が聞きたいのは今の状況なんだよ。俺がてめえをこうやって抱えて走ってんのはな、別に助けたいからじゃない。助けられるのが嫌だからだ。しかもあの女、俺だけ逃げても追いかけてくるだろうよ。」

「っ！そんなの、分からないだろうが！」

怒りというものを表に出す時、誰もが激情するとは限らない。俺みたいなタイプは特にそうだけど、心の中で怒りを煮えたぎらせながらも淡々と言葉を発する奴もいる。

んで、ルディウスみたいに気持ちまかせに叫ぶ激情タイプと、その正反対なタイプがぶつかれば、表面上冷静な奴の方が有利だ。

「だったら聞くが、てめえは今現在、最強なのか？」

もし肯定したら、俺は即効ルディウスを後ろの鬼に献上してやるよ。だけど、予想通りルディウスがこの質問に頷くことはなかった。

「相手が格下だったら、俺は先にお楽しみを確保しておくな。」

欲求に忠実な奴なら尚更。しかも、サキュバスからしてみれば俺達は契約している間柄で、先にルディウスを狙ったとしたら俺がそれを防ごうと思うているはずだ。だったら尚の事、俺の確保を優先させたほうが楽だろう。

美女に迫られるってこと自体には悪い気はしないが、でもまあサキュバスっていったらあれだよな。精を喰らう魔物だっけか、悪魔だっけか。流石に俺、人間でいたい。魔王と契約させられてるけど。後1年の命だけだ。

でもサキュバスが死ぬまで生きさせられるよっかは、まだマシだ。

「で、だ。俺は保身の為に動きたいわけだけど。サキュバスってのは、人間でも倒せるのか？」

「…お前の順応性の高さが怖いんだが。見える人間なら倒せる、こともない。」

おいおい。そろそろこの餓鬼、お仕置きしていいですか？
嫌味以外はぐらかしてばっかじゃねーかよ。はつきりしない奴っ
てのは、どうにも苛々する。

（危ないなんて百も承知なんだけど。）

もう呆れるしかなくてはあゝと溜め息を吐いている横で、ルディウ
スも何故か落ち込んでいるけど。仕方ない、詳しい事は後で吐かせ
るとして。

いつの間にか人気が無い場所へ辿り着いていたのか、やっとこさ切
なくなる視線を感じなくなっていた。

そのまま、周囲を探れば都合良く武器も隠れ場所も満載の工事中の
ビルを発見！

（これはあそこしかないでしょ。）

人生で最高の速度を出している足は止めず綺麗にターンを決めて、
そのまま山積みになされていた鉄パイプを一本拝借。

ちよつと心もとない作りかけの階段を上がって、柱だけで何も無い
広いスペースがあつた階で戦うことに決めた。

「うえ、走りすぎて吐きそうだ。」

「吐くもの入ってないだろうが。」

ほんつとにこいつは一言多いな。

ええ、胃液しか入ってないですよ。

つと、カリカリしすぎてる場合じゃないな。
耳を澄ませば、カッソカッソとサキュバスがこっちに向かってくる
足音がする。

「物理攻撃は？」

「え、ああ、効く。」

「んじゃ、俺前衛。お前後衛な。」

鉄パイプをしつかり握り、後はサキュバスが出てくるのを待つだけ
の臨戦状態に入り、いつでも来いよと気合を入れた。

柱に隠れて奇襲も考えたけど、失敗した時のリスクが高いから却下。

一番無難なのが、俺が前に出てサキュバスの気を引き付け、ルディ
ウスがああ空気砲で隙を作り止めを刺す。

上手くいく確証なんてものはないが、それでも頭の中で何度かシュ
ミレーションをした。

なんで、初の喧嘩が人外相手なんだよ。

これでも俺、人殴った事もないんだけど。

でも、不思議と落ち着いていた。

握る鉄パイプは両手で持ってたなら、なんかすんごく違和感がしたか
ら片手にするか。

そんな俺の様子をじつと探る様に見ていたルディウスは、俺が片手
に鉄パイプを持ち変えた時、一気に焦りを表す。

「お前、戦の経験ないのか！」

(えー…、今更ですか。)

どうやらこのちびっ子は、俺が何かしらの格闘技を齧っていたり、もしくは喧嘩慣れしてると思っただけらしい。

「そんな剣の持ち方したら、隙がでまくりだろうが！」

「いやいや、鉄パイプだから。」

これが剣って、名前はパイプソード？

うわ、格好悪っ！

「もういい、やはり私がやるからお前は下がってる！」

「ばっ！せっかく俺が頭使って足酷使したっつーのに。台無しになるだろうが！」

ぐいっと前に出ようとすするルディウスを足で押し返そうとしつつ、二人でぎゃーぎゃー。

「貴方達、本当に契約してるの？陛下も、小さくなって可笑しくなっちゃったのかしら。」

そんな俺達に、流石に呆れたのかサキュバスがとうとうっつこみを入れた。

俺としても、嘘であってほしいんだけどね。

しかし、ダメージを受けていない俺に対し、ルディウスが一気に眉

を響めた。

出会ってから今まで、一度も見た事無かった表情だった。

呆れてとか、言う通りにしない俺に向けてとは全然違つ、例えるなら侮辱されて怒るようなそんな感じだ。

「己の縄張りすら作れずに堕ちたサキュバスが、この私に可笑しいだど？」

餓鬼の口から出るには到底低すぎる声と、違和感ばりばりの言葉使い。

ルディウスの”本来の姿”を知らない俺とは違い、サキュバスはそれを知っているんだろう。

刷り込まれた恐怖に一瞬固まったのを、無視することは出来なかった。

ルディウスは完璧に冷静さを無くし、コツリと無駄に足音を響かせながら俺の前へと出た。

サキュバスは無意識なんだろう、視線は餓鬼のくせになんか違う表情をしたルディウスに釘付けのまま片足を後ろに下げる。

(怖っ。だけど、ちょ、ま………！)

「な、なによ。最強の魔王なのは、封印される、前の話じゃない！あれから、どれだけ経つてると思ってる、のよ！」

サキュバスは震えながらも、強気に言葉を返した。

それにより、ルディウスの威圧感が増す。

だけど、いつてしまえばそれだけだ。威圧感だけは本物だが、それに見合った能力が無い。だから俺は焦ったんだ。

逆上されては困るから。

だけど、気持ちとは裏腹に、この蛇に睨まれた蛙が感じるような威圧感に対して免疫のない俺は動けずにいた。

(まずいつて。止まれって俺の震え！)

神様に嫌われている俺の願いは、いつつも菓子折り付きで叶えられない。

サキュバスは、それにと続けた。

「最強って言ったって、下らない情に流されて、封印されるオツムの足りない魔王じゃない。あんたの時代なんて、とっくの昔に終わってたのよ！」

「……なんだと？弱小の、魔物にも魔族にも慣れない種族めが。己が世界にも留まらない塵が偉そうに。」

「なんですって!？」

どっちも、終わった。

気になる単語がありすぎるのはちょっと脇に置いておいてだ。

サキュバスは、ルディウスの逆鱗に触れ。ルディウスも、サキュバスの逆鱗に触れ。

二人は、俺の逆鱗に触れた。

この偉そうな餓鬼と出会った時に聞いた何かが壊れる音は、神様の思惑通り、そして残念ながら、俺のちっぽけな日常が欠片も残さず崩れる音だったんだろう。

「堕ちたのはあんたじゃない！さっさと死にやがれ！」

「てめえは何がしてえんだよ！」

サキュバスの鞭がルディウスに襲いかかると、俺がルディウスの横っ腹に容赦なく蹴りを入れてふっとばし、立ち位置を奪うのは同時だった。

「つき！」

「てめえは一切説明も知識も与えずに俺を巻き込んでおきながら、勝手な主張と行動ばかりしゃがって。拳句に俺まで殺すのか、あゝあ？これが終わったら、質問には全部答える。とにかく今は、俺が前衛でてめえは後衛だ。柱の影でびくびく震えながら、適当に空気をぶっぱなしやーいいんだよ。この、無能がっ！」

迫り来る、鞭。息を呑むルディウス。

震えは消えていた。

「とにかく！」

躊躇なく目の前にきていた鞭を片手で去なし、サキュバスを無視してルディウスにパイプソードを向けた。

そして冒頭へと戻る。

頭の中は真っ白で、俺は俺であって俺でなかった。

2 - 5 人間9割は黒歴史でできている…はず！

頭に入った血は、さっきの攻撃を防いで一気に下がった。

冷静に戻れば戻る程、正直、逃げたくなる。

かといって、後ろで不安そうに、それでいて怒っているルディウスを見捨てることも出来ないと思う。

助けられたくないなんて、ただの建て前だ。

確かに、こいつと出会ってから毎日精神と体力共にくたくたで面倒くさい。

だけど、俺の無機質な日常が色づいたのも事実だから。

(大分絆されてるな。)

さっきまで怒っていたのも、俺を頼ろうとしないルディウスに苛々したのかもしれない。従者を庇うご主人様ってどーよ。

こんな状況で余計なことを考えすぎだけど、浮かんでくるんだから仕方ない。

しかも、ルディウスのことばっか。

本当、らしくない。

らしくないよ、俺。

感情的になるのは、かなりいただけない。見えるものも見えなくなるし、見なくていいものが見えてしまう。

ということで、今日の俺は黒歴史として記憶から消し去ることに決定。

抹消してしまおう。

「安心してね。私好みの君の顔は傷つけないから。」

サキュバスはクスクスと笑った。

若干青筋がたつてるけど、それはルディウスに対してだ。

（そりゃまあ、余裕に思うだろうな。）

サキュバスにとって、男は餌みたいなもんだらう。1対2とはいつでも、相手は餌と餓鬼。本気になれっほが難しい。俺が初撃を防いだことで、向こうも駆け上がった血が大人しくなってくれたようでほっとする。

（油断してくれたら、こっちは助かる。ただ、ちょっとむかつくな）

思わず眉を顰めれば、あらやだいい顔と更に喜ばせてしまった。

「今後の為にも、今のうちに賤てあげるわ。」

「慎んで遠慮する。」

冗談じゃない。そんな鞭でビシバシやられたら、色々挟れる。

「ふふ、つれないのね。」

「あいにくと、苛められて喜ぶタイプじゃないんでね。」

それを跪かせるのが最高なんじゃない、と女王様、違った。サキユバスはカミングアウトした。

まあ、その気持ちは分からなくもないけど。ただし、する側だったらの話ね。

「お前はインキュバスか。」

珍しくルディウスにつっこまれたよ。

呆れた顔を向けられ、素知らぬ顔をする。

この間も、サキユバスは楽しみで仕方ないのか鞭でビシビシと地面を叩き、尻尾を揺らして舌なめずり。

俺が動くのを待っているんだろう。

本音は、相手の動きを待ちたい所だが、これ以上はまたルディウスが騒ぎ出しかねない。

鳥頭は恐ろしい。

「恨みつこ、なしってことでよろしく。」

俺は無意識に、パイプソードの切っ先を刀でも持つかのようにサキ

ユバスに向け、左手を逆側に添えた。

「行くぞ。」

合図は、ルディウスの為に。

（お前が最強の魔王だという証拠を見せてもらっぜ。）

鞭をならせるサキュバスに対峙した。

「生意気ね、坊や。生意気すぎるわ！」

動きが変則的で自在に操れる鞭は、そのせいで使い手を翻弄していた。

俺の視線は、サキュバスの鞭を持つ手首に固定されている。

ふっと息を吐き、手首から狙われている位置を予想して鞭を去なし、すぐさま構えを前方に戻す。

さつきから、それを繰り返していた。

観察力と視野の広さ。それが、俺の最も頼りにしてる長所だった。

それは今までの生活が身に付けさせてくれたものであり、全てに於いての命綱。

あと、どうやら俺は反射神経も結構高いようだ。元々、運動は苦手

ではないし身軽でもある。じゃないと、頭に体が着いてこれないもんな。

だけど、自慢じゃないがもやしっ子。力任せに迫り来る鞭を叩き落と芸当は出来ない。だから、軌道を反らすためにパイプソードを使う。

最初からこの武器は、防具として使っつもりだった。

それでも、既に手が痺れてきていた。

サキュバスも、軽視していた俺が予想外に粘るもんだから、徐々に苛立ちを見せてきている。

体力と精神共に疲労し、額を流れる汗。

手首だけ見る。そこだけを観察しろ。

自分にそう言い聞かせ、無理やり冷静さを保つ。

でないと、色々折れる。

だって、鞭を去なす度に床から変な音がするんだもん。

ピシパシじゃなくて、ドカって音が。

しかも音と一緒に、足になんかの破片が当たる。

それって確実に、床挟れてるってことだよな。

きつと今周りを見ちゃったら、所々にちっちゃなクレーターがあるよな。

コンクリ砕く鞭にさつきから対抗してるとか考えたら、冷静になんてなってるられないよな！

(だ、だめだぞ樹。考えるな、感じるんだ！)

利き腕は結構限界にきてるが、ルディウスはまだ一切の動きをみせていない。

ただ、視界に映らないってことは、ちゃんと隙を窺ってはくれているようだ。

(それでいい。後は俺が、サキュバスの意識を向け続けて隙を作ればいいだけだ。)

チャンスは1度きり。

失敗は許されない。

タイミングは、サキュバスの苛立ちが限界に達する直前だ。

「もう！なんでそんなただの棒が抉れないのよ。」

(抉れるって言っちゃったよ。やっぱり俺を抉るつもりだよ…。)

やーめーてー。

全力で引いてしまい、今自分がどんな顔をしているのか想像がつかない。

俺には、見た目冷静な顔をしているようにと念じるしかできなかった。

ちなみに、コンクリをも抉る鞭を去なしてもパイプソード(だんだん愛着が湧いてきた)が抉れない理由は、鞭の鋭利な棘が全て下に向いている、つまり、鉤状になっているからだ。

あれは、まず対象に引っ掛けてから所有者が自ら引くことで決れる仕組みだ。

なら、引っ掛けられる前にこちらから鞭の表面をすべる様に力を加えて力の方向を変えればいいだけ。

だからパイプソードは決れない。その代わりに、目を凝らして見てみれば、無数の引っかき傷が出来上がっている。

「あんたが格下だからだろ。」

「なんですって!?!」

思わず出てしまった言葉。いや、実際には狙った言葉。

失敗が許されないものほど、俺は自らそのタイミングやチャンスを作るタイプだ。

失敗の恐怖とか不安は、希望がある奴が抱けばいい。

最初から、餌に貶されたら逆上してくれるだろうってのは予想してたからな。

「陛下といい、あんたといい。もういいわ、知らないから。」

ぎりつと鞭を握りしめたサキュバスは、一回だけわざと俺の真横の床に鞭を打ち付けた。

「っ!」

盛大な音と共に、無数の破片が俺を襲う。

顔を庇いながらそれが落ち着くのを待ち、そろっと隣の床に視線を

向けようとして……やめた。

若干視界に入ったのが分かった瞬間、やめようと思った。見たら腰を抜かす自信がある。

たぶん、今までのクレーターとは比にならないものが出来上がってるだろうなって、そう考えられるくらいには見たから十分だよな。

「はっ、手加減してやってたんだっつーの。なんで俺が魔王の従者やってっと思ってるんだよ。」

「どうせ、言葉巧みに操られただけでしょ。」

正解です！

とは言いません。喉まで出かかりましたがなんとか抑えました。

代わりに、ばーかと貶してから用意していた言葉を放つ。

最大限、俺にできる最高の睨みを利かせながら。

「俺が人間の中で最強だからだよ。」

「っ!？」

ビバはったり。

ここで初めて、俺は自分からサキュバスの方へと突っ込み攻撃に転じる。

チャンスを作る為の準備は整った。

後はご主人様のお仕事ですよ？

2 - 6 胸は神様の贈り物

肩で息をする俺と、冷たい目をしたルディウス。

周囲は、ぶちテロでもあったかというぼろぼろで悲惨な光景だ。

終わってしまったえば、どんどん実感や現実感が薄れていく。

だけど、自分の体の疲労と目の前のモノ、惨状が現実だとはつきり示していて。

「やだ…っ…、う…っ…っ。」

俺達は、朦朧とした意識の中で痛みに呻くサキュバスをしばらく黙って見つめていた。

結果から言おう。

見事に俺達は、サキュバスに勝った。

攻撃が振りだというのを、ご主人様はちゃんと理解してくれていた。鞭が俺の右わき腹に狙いを定め、それが命中することをサキュバスが確信した瞬間、そのサキュバスに右側の柱から巨大な空気砲が放たれる。

俺はルディウスが動いたことを確認できた時に、攻撃のために振り上げたパイプソードを右後ろへもっていき、目一杯足を踏ん張りながらバッターよろしくフルスイング。

空気砲の勢いも加わり、半ば自分からパイプソードに当たりにいったそのダメージは相当なものだったはずだ。

しかも、狙ったのは頭。

的としては胴体に比べて小さく、命中率には不安があったけど、そこはまあなんとか当たって正直ほっとした。

それでも、人間なら頭蓋骨陥没は免れないほどの力がぶつかったにも関わらず、意識を完璧に失うことがなかったから恐ろしい。

まあ、人外ということでも色々考え、だからこそ頭を狙ったっていうのもあるんだけど。どんな生き物でも、基本頭を潰せばいいよな！
って感じ。

そうして終わった戦いだけど、ルディウスは何かを考えていて、俺もこの後のことを考えている。

サキュバスの事もそうだけど、いかに人目を突かずにこの場から立ち去るかのほうが重要だ。

きっと、仕事に来た人は現場を見て唖然とするだろう。

警察に通報もするかもしれない。なら、人目につくのはかなりまずい。

「つき。」

「……あ？」

と、ルディウスが渋い顔をしたまま俺に声を掛けてきた。

お互い口調が荒くなるのは、興奮がまだ覚めやらないからか。

「それはもういい。」

そんな俺に、ルディウスはそう言った。

はて、それとはなんだろう。

そう思っていれば、すっと静かに指で示す。

それは、俺の相棒になりかけているパイプソードで。

「離して、いい。」

この時ルディウスが何を思っていたのかそんなことは健闘もつかないが、表情だけで言えば、どうも俺を訝しんでいる気がした。

俺は俺で、ちよっぴりパイプソードとの別れが名残惜しい。

といつても、頭を殴った時の衝撃で見るも無残にひしゃげたからには、もう活躍の場はこないだろう。

しっかり指紋を消すのは忘れず、パイプソードは役目を終えただけの鉄パイプへと戻った。

「こいつ、どーすんだ？」

「殺すさ、勿論。私の封印が解けた事を知ったのは偶然だと言っていたし、ばれたら困る。」

そうして状況を終わらさべく聞いた質問。

いつ情報を引き出したんだよ、とは聞かない。たぶん見つかった時に聞いたんだろうし。

それよりも気になった。すごく気になる。

ルディウスは、ナイフを取り出していた。

自分の横の何も無い空間が黒い円を浮かべたと思ったら、その拳よりすこし大きいぐらいの円に手をつっこんで。

(武器、あつたんかーい！)

大きなサイズじゃないから、武器として使えたかどうか分からないけど。

なんか俺の努力ってことごとく無駄なんじゃないかと思ってしまうほど、ナチュラルに出しすぎだ。

いや、いいんだ。パイプソードが十分俺の為に戦ってくれから。

と内心思いつつ、ルディウスの考えに同意する。

しゃがんでサキュバスを覗き込めば、死を恐れて顔を青くしていた。といつても動けないんだから、潔く諦めるしか道はないんだけど。

「んだなー。ばれたらこういうことが増えるんだよな？」

「ああ、間違いなく。取りあえず質問は後だ。ちゃんと答えるさ。」

「OK、ならいい。だったらほら、貸せ。」

ん、と手を出せば、ルディウスは明らかに戸惑っていた。

「どちらがやってもいいだろう？」

まあ、そうだな。

だから俺がやるって言ってるんだけど。

「いいよ、俺がやるから。」

すっと小さな手に握られていたナイフを奪い、そのナイフをしげし

げと眺めた。

丁寧な装飾がされていて、素人目にもいいものというか高いと分かる。

そのまま、どこが急所か問えば戸惑いはまだあるのか、ちょっと上ずった声で心臓と教えてもらった。

「……すまない。」

小さく呟かれた声はシカトしておいた。

だって、俺が引き受けたのは自分の為だし。

流石にほら、見た目が幼児な奴が見た目人とそんなに変わらない生き物をナイフで刺すとこ見るのは気分が良くない。

理由はそれだけだ。

逆に、嫌がる要素がないっていうか、罪悪感はもちろんあるけど、実行したところで俺が社会から迫害されることはない。

そんな冷めた俺とは違い、ルディウスはきつと、巻き込んでしまったこととかに少なからず申し訳ないと思っではいるんだろう。

わがままが主成分みたいな奴だから、だからといって俺の日常が返ってくることはないだろうが。

そこは諦めるしかないって、もう分かってるからいいけどさ。

「んまー痛いだろうけど、悪いな。」

挑んだ時点で、負けることも考えていて当然だし。

早々に立ち去る為、俺はそう一言だけ告げて、躊躇なく心臓目掛け

てサキュバスの体にナイフを埋めた。

「うわ、やわらけー……。」

「お前なあ、どっちが悪魔か判断しかねるぞそれは。」

その時に不可抗力で触ってしまった胸に対して思わず出た言葉にル
デウスがつっこんでいたが、これは仕方ない。

一瞬苦しそうに顔を歪めたサキュバスは、すぐに弛緩してそして身
体を砂に変えて消えていった。

「ん？」

その後に残ったのは、不思議な赤い石。

「それは魔力石だ。まあ、名前そのまま魔力の塊だな。元の魔族が
持っていた魔力の大きさに応じて力の差があるから、この石の場合
はそう役には立たないだろうな。」

「ふうん。ならほら、お前持ってる。俺が持ってるより、少しはマ
シだろさ。」

ほい、っと投げたその石をルデウスがキャッチしているのを確認
して、俺は立ち上がって出口へと歩きだした。

「質問は帰ってからみっちりさせてもらうからなー？」

「ああ、分かっているさ。」

そして、横に並んで歩くルディウスに気付かれないよう、腕を頭の後ろにまわす。

その手は貸すかに震えていた。

ナイフを埋めた時に感じた感触が抜けず、吐き気を覚えながらも、心が割り切っていることが少し悲しくて。

悪魔呼ばわりされても仕方ないよな、と一人呟いた。

2・7 試合に負けて勝負に勝つが如し

サキュバスとの戦いのその夜。
幼児と高校生が外にいるのには適さない時間に、俺達は出会ったあの幽霊屋敷にいた。

理由は勿論、ルディウスに説明をさせる為だ。

「面倒なことだな、お前も。」

「まあなー。」

あの後、人目に付かないよう全力で注意しながら帰路についた俺達は、一度中野家へと帰宅し食事をして、もう一度外へ出た。

あえて偽装工作をしたのは、あの家で話をするにも、たぶん夜遅くまでかかってしまうと思ったので、声が自分の部屋から漏れて訝しまれても困るからだ。

家の者には俺が、延々と独り言を言っているようにしか聞こえないだろう。

そしたら、問答無用で病院に放り込まれかねない。流石に俺も、それは勘弁したいよ。

というわけで、時間をみて幽霊屋敷へと来たってわけ。

そんな回りくどいことをしなきゃいけない俺に、気を使って労ってくれたルディウス。

だけど、幼児に慰められるっていうのが逆にダメージを与えてきて

いるのは秘密だ。

そして幸いにも、明日は学校は休み。
朝までかかろうが問題ない。

無駄に気合を入れておかないと、こういった機会が今後もないかぎり、普段のルディウスは大切なこともはぐらかしかねないからなあ。

「んじゃま、始めますかね。」

「お手柔らかに頼むな。」

苦笑まじりに答えたルディウスに、必要なこと以外詮索はしねーよと断りを入れて、俺は今まで溜まっていたものを遠慮無く言葉にし始めた。

「お前は言っちゃえば、異世界から来たってことで合ってるんだよな。」

俺が手始めにしたことは、質問というよりは確認だった。

二人仲良く(?)、ルディウスが封印されていた本があった書斎の本棚に寄りかかりながら、静かな場所で静かに話しをする。

ほこりっぽさがまた、なんともいえない雰囲気醸し出していた。

「ああ。」

「で、お前は自分の意思でこっちに来たんだな？」

「まあな。しかし理由は」

言いたくない、という言葉は途中で手を振って遮る。

といつても、言わせる為にじゃなくて分かっているという意味を込めてだ。

「詮索はしない、って言っただろ。俺の質問は全部、俺が必要なものだけだから。」

「すまん、助かる。」

それに、その詮索が俺にとって良いものにはならないと思ってるしな。

だから、礼なんていらぬ。

「あーでも、封印された理由は話してもらいたいかも。明確にお前を狙ってたんだったら、封印が継続されているか調べに来ていた可能性があるし。それに、もしそうだったらバレたら追ってがかかるだろ？」

そうなったら、かなり面倒なことになりそうだ。

俺じゃ対処しきれない可能性のが高いし、そんなことになるなら関わりたくない。

だけどルディウスは、即座に首を振った。

「理由は正直、俺にも分からん。だが、追つてについては否定できるな。封印されてから暫くは、文字通り全てを封じられていたが、そうだなこっちの世界で150年ぐらい経ってからは、思念体と言

つたら分かりやすいか。それで外には出れていた。その間、私目的の訪問者は一切いなかった。思念体だから、誰にも気付かれなかったがな。」

「いやいや、待て待て！お前一体どれだけ封印されてたんだよ。」

「437年。」

さらっと告げられたものに啞然。恐らく、わざわざ俺が分かりやすい時間で計算してくれたんだろうが、それでもだ。

そんだけの時間、こいつは一人で過ごしていたってことが。

自分は見えるのに、他の目には止まらない。そんな日々を。

寿命については、疑問に思ったところで仕方がないだろう。そもそも、人種というか種類が違う上に、世界までもが違うんだから。

それに、異世界について疑いを持つとうにも、目の前でファンタジックなものを見すぎているため否定のしようが無い。

「あー、うん。まあいい。むしろ助かった。これで、大抵のことは驚かなくてすみそうだ。」

暫く頭を抱えて混乱しそうになる脳を落ち着けてから、俺は再び気合を入れた。

危うく、同情心から答えを出そうとしてしまったからだ。

何の答えかは、今は言わないし悟られるつもりもない。

相手は人外。しかも、自称魔王様。出会い頭に油断しまくった分、慎重にいくべきだ。

「くつく、お前は本当に不思議な奴だ。今のを驚いたで済みますか、普通。」

そんな人の気も知らず、ルディウスは楽しそうに笑った。

余程可笑しかったのか、それとも嬉しかったのか。破顔する姿は、初めてその姿に相応しく見えた。

「よし、んじゃ封印云々での追っては今の所気にし無くていいだろうな。じゃあ、何で今日襲われたんだよ？」

そっからは、質問と確認の繰り返しだった。

ルディウスは約束通りはぐらかすことはせず、答えられない事や答えたくない事はその都度はっきりそう言っただ。

そして話を聞いた限り、どっちにしる今後ルディウスが襲われることは回避しようがないことが分かった。

その理由が、壮大なスケールのものとなってまた頭が痛くなったりもしたが、聞いて損はしなかった。

どうやら今日のサキュバスとか、俺の世界にいるそうだった種類の魔族と呼ばれるものっていうのは、元はルディウスの世界で産まれたものらしい。

魔族の他に魔物というものも存在しているらしいが、予想外にその定義について拘りを持っているルディウスの説明が長すぎたため、今回そこは割愛。

それよりも重要なのが、何故その魔族が俺等の世界にいたかっただ。

こっちにいる魔族は様は、生存競争に負けた弱者。自分の世界じゃ

生きていけないから、こつちの世界に堕ちてきたらしい。

そして重要となるのが、ルディウスというか、ルディウスの封印された魔力っていうことだ。

「魔力というのは、潜在的なもの。修行や鍛錬によってその質を上げることはできても、産まれた時に定められた限界は超えられない。例え能力的に吸収できたとしても、魔力石と同じくそれは消耗品だ。その身を喰らおうが、何をしようが得られはしない。だが、例外として、切り離された魔力だけがその身に取り込むことができる。つまり、あのサキュバスは、私の封印された魔力が目的だったわけだ。」

しかし、予備知識っていうのがこれほど大事なものだっただとは。

まるで、足し算すら知らないのに、の計算をさせられている気分だ。あまり理解できていない様子の俺に、ルディウスも困った感じで肩を竦めた。

まあ、本人にとっては知っていて当然な情報だから、今以上の説明を求めたって困るだけだわな。

「えーっと、あー…、つまりだ。魔力石を氷に置き換えたとして、それが飲み込むには無理な大きさだとする。だけど、力を得るには飲み込まなきゃいけないんだけど、その氷を溶かすことは出来ないんで、封印されてるルディウスの力は氷ではなく水で保存されている。だから、手に入れば飲み込めるから力を得ることができると感じ、か？」

仕方なく、無理やり、本当に無理やり今の話を自分なりに分かりやすくまとめた。

「そう！そういうことだ！」

するとどうだろう。予想外にうまく例え方だったらしく、柄にも無くルディウスが興奮した様子で同意した。

なんだろう、前にも説明したことがあって、理解してもらえなかった経験でもあるのだろうか。

まあそこは、詮索でしかないので聞く気はないけど。

「あれ？でもだったら、お前を狙う必要ないだろ。力持っていないだし。」

そして抱いた疑問。簡単なことだ、封印を解いてしまえばいいだけじゃなか。

わざわざルディウスを狙う必要がどこにあるん……、いやあった。

「本体の封印は、他人でも解けるんだがな。力の封印は、本人しか解けないんだ。」

質問した後に気付いた答えと同じ事を、ルディウスも口にする。ということは、成る程これは面倒だ。

俺の考えている事が分かっているのか、それでも、と言うルディウス。出来ればそれ、聞きたくないな。

「私は、つき以外の人間に頼むつもりは毛頭ないからな。」

（いや、諦めはしてたけどさ。少しばかり期待させてくれよ。）

余りにも周囲に邪険にされすぎてて、一人ぐらい自分を気に入ってくれる奴がいてくれたらな、なんて思ったこともあったが、まさかその小さな願いがこんな形で叶えられるなんて誰が予想しようか。ただ、俺は元来切り替えの早い人間だ。

また文句を言われるのかと微妙に苛立っているちびっ子を隣に、俺はまず一つを決めた。

後は、一番重要なその一をベースに境界線を決めよう。諦めるしか道がないなら、妥協にもっていくまでだ。

「いい、それはもう諦めた。だから、こっからはこれから先必要なことについて聞いていくぞ。」

「お前のその適応能力は尊敬するが、切り替えの速さは不気味すぎる。言っとくが、死ぬ可能性だってないわけじゃないんだぞ？」

しかし、そんな俺の心境とは真逆なルディウス。張本人がそれを言っちゃだめだろ。

もしくは、俺が拒否して粘ると考えていたのか。だとしたら、こんなにあっさりしてたら不気味に思っつかもな。

「つきは、何を考えているのか分からなくて困る。」

しまいには、死ぬかもしれないと脅されても動じない俺が気に食わないのかぶくーっと両頬を大きくした。

おいおい、頬を膨らませたところで、俺には何の効果もないぞ？ぶっちゃければ、ちよっと可愛くてときめいてしまったりしてなく

もないが、むーって唸ったって俺にはどうしようもないからな。

「死で脅したところで、都合が良いって言ったり、しれっとしてたり。私が魔王だと信じているみたいだが、だからといって特に態度を変えたりしない。それどころか、魔王を顎で使ってサキュバスと戦うわ。お前、本当に人間か？ 思念体でうるつくようになったから、大分長い間こちらの世界の人間を観察してきたが、つきの様な奴は一人もいなかったぞ。」

(こいつ、怒鳴った事根に持ってやがんな。)

頬を膨らませたまま、両膝を抱え、床に「の」の字を書き始めるチビが、最強魔王様な世界が少し哀れに思えた。もしかしたら、身体に併せて精神も幼くなってしまうているのだろうか。

「ま、腹黒いからなー。」

仕方なく、頭をぐりぐりと撫でてやる。

おまけに頬を突付けば、ぷす〜っとなんとも気の抜けるような音。

「ぶっ！ 良い音したじゃんか。」

「っ〜き〜?」

さっきよりかは、幾分穏やかな空気が流れた。

お互いが気付き、でも敢えて言葉にはせず。そして、それぞれが噛み締める。

きつとルディウスも、こういう関係を知らない。

こういう、何の柵も邪魔しない関係を。

それから俺は、残っていた必要なことを聞いていった。

手がかりはあるのか、とか。どういった魔族が、地球にいそうなのか。

あと、封印を解けばどういった弊害が出てくるかとか。5つの封印のうち、いくつ解けばある程度の力を取り戻せるのかか。

始めより細かく、詳しく。予備知識を溜めていく。

何より、重要だったのが。

「何個封印を解けば、仲間を呼べるんだ？」

「……仲間か。」

「臣下つっーのか？そういうのもいい。」

仲間はいないのか、そんな質問は不粋だと分かっていた。

いたらとつくに頼っているだろうし、そもそも俺が封印を解く必要なんてなかっただろう。

だからこそ、この問いだ。

俺の意図を悟ったのか、そもそも仲間を呼ぶ事事態難しいことだっ

たのか。

暫く黙ったまま、ルディウスは自分の掌を見つめていた。

「…3つ。恐らく、3つ分取り戻せればいけるはずだ。」

そして、ようやく口を開いたルディウスは真っ直ぐに俺を見る。

日本人と同じようであるで違う、黒というよりは漆黒というのがしっくりくる瞳で射抜くように。

だから俺は、照れを隠すようにその瞳の上、額にでこぴんをくらわせてやった。

「あだっ！」

「仕方ないから、手伝ってやるよ。ただ襲われるだけってのは癪だし、そもそも大迷惑だからな。なら、お前が自分で自由に動けるようになるまでっていう制限付きで、契約に従うさ。」

それが俺の妥協の結果。

今でもめんどくさいとか、どうでもいいと思う部分はあるけど、俺にとってここまで関わった他人はいない。

だから、それに免じてってわけだ。

さすがに、俺等友達じゃん、てことは思わないし死んでも言わないが。

ただ、協力者程度ならなってやってもいいと思っではいる。

「つき、私との契約内容を思いつきりシカトしてるだろ。」

「だーから、余命云々は最初に言ったけど逆に俺にとって都合が

良くなるかもしれないから気になんないんだって。ただ、今のままじゃ、俺もお前も不便すぎんだろ。だったら、俺にもメリットが出るところまで手伝うだけだ。その後は、自分の力で何とかしてくれ。お前がもし、俺を死なせたくないって思うんなら1年以内に全部取り戻せばいいし。つーか、それは契約を破棄すればいいのか。」

と、ここまで言ってふと気付く。それがあまりにも重要なことすぎて、言い切ってから固まった。

待てよ、しまった。

何素直に、仕方ないから途中まで手伝ってやるとか言ったんだ俺！

ここは、手伝うことを条件に、契約破棄してくれるよう交渉するべきだった。

(うおおおお！なに妥協とか言っちゃってんの俺。詰を見誤ったああー！)

最後の最後での大失態に打ちのめされて、頭を抱えて思わず唸る。そんなことも露とも知らないルディウスは、暢気に笑った。

俺を、人間らしくないと言いながら。

「……ルディでいい。ルディウスは言いくいだろ？」

そうして俺達は、3つの封印を解く為に一緒に過ごすこととなった。愛称で呼ぶことの意味を、知らないままで……。

閑話 魔王様の観察日記

中野樹という人間は、立場柄様々な者を見ていた私ですら出会った事の無い希有な人物に思う。

と、言葉を濁せばそう言えるが、実際には変人だ。

この世界のこの国、日本ではごく当たり前の黒髪に大きく長い睫に縁取られた茶色の瞳。

まだまだあどけなさの抜け切れない少年で、それでいてとてもとても端正な顔立ち。

美丈夫というよりかは美少年であり、その綺麗な顔がなければかなりの危ない人間と言える程に中身は変だ。

出会いは突然だった。

見えているのに見てもらえない。いるのにいない。

そんな状態で過ごすようになってから、250年ちよつと。

寂しいとか、解放されたいだとか。そういった感情もとつくに沸かなくなつた頃にそれは訪れた。

といつても、中野樹という人間は、本体が封印されている場所に何度も来ていたので、私は知っていた。

少年は私が見ているということにも気付かず、初めは様々な顔を見せていた。

そのほとんどが悲しみ、苦しみ。負の感情ばかりだったから印象は強い。

しかも、屋敷に訪れる度にそれは色を増して行き、ある時突然止まった。

それからは、失笑、無気力、怠惰。

見た目にそぐわない雰囲気と言葉を失った。

私は、孤独を見ていたのだ。

或いは、まるで姿見の様に自分と重なった。

なんでもないと云うように、何も感じないというように、紫煙を揺らすだけ。

自分がその立場だとしても、存外本人は中々当たり前となって気付けない。

それが、こうやって第三者となってみれば気付くんだからおかしな話だ。

そして、ここ数年何度も屋敷に来ていた少年はその日も笑顔を失った顔で無表情に座っていた。

時たま携帯をいじくり、写真を眺め。独り言を零しながら、ただ時間だけを浪費する。

しばらく前から、私はこいつしかいないと思っていた。

いや、こいつが良いと。

封印が解けるなんて諦めていたから、それは些細な願望でしかなかった。

いや、それ以上だったかもしれない。こいつ以外にだったら、解かれないとすら思っていたのかも。

「分かってるっつーの。俺が保険である間は、みんな幸せなんだろうよ。」

そして、少年は口にした。

その言葉は、耳を通り脳髓を刺激する。

『私が内に秘めていれば済むことだろう？それで皆が幸せであれば、何も苦勞ではないさ。』

『その皆には、陛下も含まれているのでしょうか？』

ある臣下と昔交わした会話が、突如浮かぶ。

当時は、何を言っているんだと思っていたが、ああそうか。

私がそれを言った時、あいつはこんな気持ちだったのかもしれない。

「それには、お前も含まれているのか？」

気付けば、届かないと分かっているながら聞かすにはいらなかった。

この少年に、友は家族はいないのだろうか。

まあ、居たとしてこんなにも孤独を纏わせていたとしたら、私はこれほど興味を惹かれなかつただらうか。

それは只単に、無いもの強請りや一人よがりでしかないから。

自笑しつつ少年に目を戻せば、その身体は固まっていた。

若干きよるきよるして、両腕で自分の身体を抱きしめて身震いをする。

「は…？やばい。今俺、幻聴が聞こえるぐらい病んでた…。」

ああ！この言葉を聴いた時の歓喜といったら！
驚いたのは私の方だ。

神という存在を初めて意識し、感謝したほどだった。

「幻聴ではない。」

半信半疑でありながら、今度は期待を込めて言う。声が震えるなんて、今までの人生であっただろうか。

「え、いや。いや、いや、いや、いや、いや！」

再び反応があり、確信した。

それからは、平静を装いつつ少年を逃がさないよう必死だった。あの時の自分の必死さは、きっと思い出す度に苦笑いしてしまうだろう。

これが恐らく、黒歴史というものだ。

この少年、中野樹との出会いは、私に様々な変化を与えてくれる。出会ってまだ1ヶ月程でそうなのだから、これから先はもっと違った世界を見せてくれるんだろう。

だから、樹もそうであって欲しいと思う。

養子か何かなんだろうが、樹は中々上流の貴族だった。

しかし、平民のらしくて待遇は眉を顰めるだけじゃ済まない程だ。

与えられている部屋は、屋根裏のようなベッドで半分以上埋まって

しまつ狭さで最低限の家具しかなく。

食事も、住みこみの使用人の方が良い物を食べていると感じるぐらいに質素で、しかも夕食のみしか与えられない。

当然、屋敷の身内（家族と呼ぶのは樹が憐れすぎる）とは別に取っていた。

傲慢な貴族に対し、殺意が芽生える程の憤りを感じるなんて事、城にいてもまったくなかつたというのに。

ただ、内面は変人ではあるが、そんな境遇にもかかわらず中々芯が通っていたことには驚いた。

確かに捻くれてはいるしやる気の無さは大きすぎるが、学校でのあの鈍感さは正直笑える。

本人曰く、蔑まれているだけらしいが。少なくとも女達はそうではないというのに。あれは明らかに、熱を帯びている。貴族としてのプライドが邪魔してはいるが、どうやったらあれが蔑みに思えるんだろうか。

忍び笑いと判断しているものも、明らかに歓声のようなものだというのに。

しかも、だ。樹よ。少しは危機感を持って。中には男でもそういう奴がいるぞ。

私もそうだが、男色の気がないのなら、あいつ等に尻を向けるな。視線が怖い。怖すぎる。確実に狙われてるぞ！

おっと、すまない。少し取り乱してしまった。昔ちよつと、そつち方面でこたごたがあつてな。まあ、トラウマみたいなものだ。

とにかく、私は樹を気に入っている。
でなければ、あれだけ精神的に強制力の強い契約を結ぼうなんて思
わない。

だが、そこは私が気に入った樹だ。まさか、余命を定めたのが都合
が良いと言つてのけるとは、全然思惑通りにさせてはくれない。

……幼少期の身体に戻ったのも、予想外だったが。

お前は知らない。ちょっとした仕草や言動が、私の封じた記憶を揺
さぶり動揺させるなど。

例え、力が全て元に戻ったとしても、私はお前をもう手放そうとは思
っていないということなど。

『私、夜が大好きなの。だって、ルデイの髪と目は夜の色じゃない
？ だったら夜って、とっても優しい時間だわ！』

だからこそ、あの名で呼ぶ事を許したのだ。

今後も、存分に私を楽しませてくれることを期待しているぞ。

閑話 魔王様の観察日記（後書き）

ルディウスは外見は子供ですが、中身は立派な大人です。ただ、元々が我侷な性格なので、子供っぽい部分も大きいですが。

この日記は、樹に付いて学校にいった時に、暇を持余して魔族の言語で記したものだという設定。

遠く無い未来、きっとルディウスは読み返してあまりの恥ずかしさに悶えながら焼却処分するでしょう。

樹はその様子を目撃して、何やってんだこいつと呆れて見るか、もしくはこっそり中身を見ていた場合、馬鹿にして笑うかも。

（ ・ ・ ・ ） プツ

って感じで。笑

さて、次章ではやっと1つ目の封印を解く云々に入るかと思えます。自己満足で書いている部分が多いので、文才についてはノーコメントで行きたいと思いますが、アドバイスや誤字脱字がありましたら教えて頂ければ幸いです。（誤字脱字は今後自分でも見直してちよこちよこ直していきます）

3 - 1 秘め事は悲を纏う

自分を無視するのも、他人を無視するのも得意だ。いつしかそれが、無視から気付かないに変わった。

分かりやすく言えば、動物が捨てられていても、誰かが拾ってくれらるだろと思いついて通り過ぎる奴から、それ自体に気付かない奴に。

感じるのも放棄して、見るのも放棄して。

今の俺には、一体何が残っているんだろ。いや、そもそも何か持っていたんだろか。

サキユバスとの対峙から3週間が経った。

その間、これといった変化も進展も無い。

「平和だなあ。いやあ、まったくもって素晴らしい。」

「…ボロボロで、よくそんなセリフが言えるな。」

「あー、おかえり。何か進展あったか？」

相変わらずルディはちびだし、封印も解けていない。あ、そうそう。実はこの魔王様、前々から察してはいたけど、元の姿は立派な大人だそうだ。

ま、どうでもいいっちゃいいことなんだけど。

「ない。それより、またか。少しは反撃したらどうだ。」

最近はずっと、俺が学校の間、ルディが情報を集めながら封印を探すという日々が続いている。

ただ、派手に動いて魔族にバレては困るから、満足な結果は出せていない。

勿論、俺も全力で手伝っている。徒歩でいける範囲のみ限定で。

「そんなことしたら、それこそ相手の思うツボだからなあ。」

あ、そっぴや変化が一つあったな。

それが今、俺をベッドに横にならせてる理由なんだけど。

「貴族の陰険さは、嫌になるほど見てきたつもりだが。これは、私もさすがに酷いと思うし、お前のその態度もどうかと思う。」

ルディはそう言って床に座り、ベッドの端に顎を乗せた。

納得いかない、理解できない。そんな顔をしながら、片肘を立て頭を支え、空いた手でつんつんと俺の身体をつつく。

「じゃあ俺は、お前をD&Sと認定してやるっ。　　いって！てめ、

怪我人になにしゃがる！」

「ドMが。」

冗談ではなくルディをドSだと言ったのを感じたのか、思いつきり服の下の痣を押されて痛みに呻いた。

以前の俺は、学校以外極力自分から外出しない、引きこもりのたまごだった。

それが、ルディに協力する約束をしてから、頻繁に外出するようにしている。

理由は勿論、封印の場所探し。

封印された当時の記憶を聞き、それを元に推測した結果、封印された力は日本以外にも飛んでしまっただろうが、その殆どは日本にあるという考えに至った。

大きな力を押さえ込むには、勿論同等の力が必要だし、それをさらに遠くに飛ばす為にはまた別にエネルギーが必要だ。

それが魔力にも適用されるかどうかは俺自身は判断できないが、その考えに対しルディの返事は肯定。

さらに、ルディの言葉を全面的に信用したとすれば（それしか予想材料がないので厳密には信用とは言えないが）、封印は油断が招いた結果らしい。

ということは、だ。油断していなければ回避できる程度の力だったということにならないだろうか。

だったとすれば、比較的近くに目的はあると考えられる。

そして、希望的予想も込めて、国を基準としてにそういう推測となった。

だけど、予想外の妨害が一つ。それが、俺が頻繁に外出するようになるのと比例して行われるようになった、いやがらせだ。

これがまた、なんていうか馬鹿が考えた結果の馬鹿な行為というかなんというか。

どうやら周囲には、インドア派に突然なったのは俺が何か良からぬ事をしようとしているみたいに見えたらしく。

だったら、外に出ないよう動けなくしてしまおう、そうしよう！

しゃあ動けなくさせるにはどうしよう。痛めつければいいんじゃない？

（馬鹿かお前等！つと、馬鹿だったな。）

とういうわけだ。

ちなみに現在、服の下にはもはや笑えるぐらいの数の青あざがある。ルデイには抵抗してるとは言っていないけど、これでも最低限になるようには頑張ってるんだぜ。受身と避けならもう師範レベルだと思っね。

「あの屋敷はもう探しつくしたしなー。」

「かといって、私じゃ誰かに聞いて回るってこともできないしな。」

「実体あって人間ですが、右に同じー。最近じゃあ、監視まで付いてくるしなあ。」

ここで、二つの溜め息が重なった。

こういうのってさ、普通、序盤は意外にすんなりいくもんじゃない

のかね。

でもま、ルデイが封印されていて、強力な力が手に入るかもしれないっていうのは地球に堕ちた魔族に知れ渡っているらしいし。

そんな状態で、本体が今の今まで封印されていたんだから、そう簡単にはいかないんだろうな。

そんな時だった。

部屋に控えめなノック音が響く。

「つき……。」

ルデイは途端に警戒を顕にする。こいつは、この屋敷の人間全員を嫌悪しているからな。

だけど俺は、相手が誰か見当がついているから気にすることなくどうぞ、と答えた。

「失礼致します。樹様、あの、大丈夫ですか？」

部屋を訪れたのは、そっち系が見たら発狂するかもしれないリアルメイドさん。

良い感じに似合う短髪が、利発さを表し。普通に可愛いと思う（年上だから失礼かもしれないが）、住み込みメイドの美鈴さんという女性だった。

「美鈴さん、前も言ったけど、俺に構うと怒られるよ。」

彼女は、事ある毎に俺を気遣ってくれるめずらしい人間だ。

その手には、たくさんの湿布が用意されていた。

たぶん、どこかで俺がいやがらせを受けているのを見たのか知ったんだろう。

「大丈夫ですよ。私、自分で言ったらあれですけど、要領いいので。」

「それって暗に、俺が要領悪いって言ってる？」

いいえ、とクスクス笑いながら美鈴さんは首を振る。

そして、ベッドで身体を起こす俺の横に湿布の束を置いた。

もう何度も遭遇している光景だけど、ルデイがすぐ近くにいるのに、彼女は気付く素振りも見せない。

それが、見える俺にとつちやどこか落ち着かなく感じる。

「あと、これ。」

「だめ。それは受け取らない。」

「でも……。」

「そりゃ、本音を言えば助かるけど、これは俺のプライドが許せ無
いから。気持ちだけ受け取っとくよ。」

こういうのを善意と取れるか、偽善と取るか。それは人によってま
ちまちだろう。

少なくともルデイは、偽善と取ったようだった。

美鈴さんが渡そうとしてきたのは、樋口一葉さんだ。ポイントなのは、ここで福沢諭吉さんじゃないってところ。

福沢さんになった途端、胡散臭さは倍増するからな。

かくいう俺は、偽善だとも善意だとも思っちゃいない。寧ろ、関心する。

「樹様は、相変わらずですね。」

苦笑しつつ美鈴さんに言われた言葉を、心の中でだけそっくりそのまま返しておいた。

彼女は、俺が中野家に来てからずっとこうして構ってくるから、2年の付き合いになる。

「人は早々変われないよ。でさ、それを受け取らない代わりと言っちゃなんだけど、変なこと聞いてもいい？」

この時は、別に期待はしていなかった。ただ、彼女の気を逸らしたいと考えていただけだ。

はい、と頷いた美鈴さんは居住まいを正して俺と向き合っ。

こういうところは、ああメイドさんだなーって思っんだよなあ。洗練された仕草ってーの？

「どっか近辺でさ、何か封印されてるーとかって言い伝えがある場所とかない？」

「封印、ですか？」

思惑通り、美鈴さんの気を逸らすことには成功したけど、当然訝しげな顔をされた。

仕方なく、歴史の授業でそういうのを調べるっていう課題が出たと誤魔化しておいた。

無理はあるけどまあ、詮索はしてこないだろう。

「んー……、そうですねえ。」

美鈴さんは、難しい顔をしながらも一生懸命記憶を探ってくれていた。

それは、心当たりか何かひっかかるものがあるからだろうか。

(もしかして、偶然が幸を相した…?)

彼女をじっと見つめる。それは、現在空気と化しているルディも一緒だ。

もしかして、いやまさかな。その2パターンの顔を繰り返して、じっと彼女を見つめている。

その様子が可笑しくて噴出しそうになったのは、さすがに慌てた。

「あっ!」

「心当たりがあるのか!?!」

そして美鈴さんは、はっと声を上げた。

思わず心当たりあるのかと聞こうとしたら、俺より先にルディの方が声を上げて、俺は中途半端に口の形を変えて止まった。

聞こえないと分かっているのにどきっとしたのは、仕方ない思っ
て欲しい。

「この住宅街から一番近いスーパーの駐車場に、小さな祠があるんですけど。そこ、何度も壊そうとしたけど、その度に何かしらのア

クシデントがあつて壊せず仕舞いだつていうのを聞いた事がありますね。4〜5年前なので、今もそうなのかは分かりませんが。」

（そこだ！）

その情報は、俺だけじゃなくルディにも絶対の確信を持たせた。何故なら、そのスーパーは幽霊屋敷からも近い。

さすがに、声を出して興奮することはなかったが、思わずルディと目を合わせて頷く。

その様子を、美鈴さんが首を傾げて見ていたけど、それは気にならなかった。

「?では、私はそろそろ失礼致しますね。」

「あ、うん。湿布ありがとう。帰り、気を付けてね。」

「勿論です。では、おやすみなさい。」

「おやすみ。」

そうして美鈴さんは、部屋を出ていった。

貰った湿布は、シャワーを浴びたら有難く使わせてもらうことにする。

ワンルームより小さい部屋だけど、ユニットバスが付いてるから、そこだけが唯一便利だ。

「思わぬ収穫だったな。」

「ああ、明日は土曜日だし、気持ち悪いぐらいタイミングが良いしな。」

足音がしなくなり、俺達は頷く。

いてて、と呟きながら身体を起こしスウェットを取り出していれば、バスタオルをルデイが用意してくれた。

サンキュ、とそれを受け取るうとするが、ルデイはバスタオルを渡そうとしてじっと俺を見上げていた。

何が言いたいのかなんて、愚問でしかない。

だけど、逆にルデイの方が気を使ってか中々それを口にしようとしなかった。

俺は、意地悪く笑った。

(まだまだ甘く見られてるってこったな。)

「あのメイド…、お前はどう思ってるんだ？」

そして、思わずその質問に噴出。やっぱりルデイは、毎度毎度俺のつぼを刺激する。

(悩んだ末に、そうきたか。)

クツクツとした笑いは、自分でも感じが悪いと思う。それでも、まがりなりにも魔王様がそんな聞き方をすることが可笑しくて仕方がない。

「……………つき、お前はほんと腹が黒い。」

しかも、精一杯の反抗がそれだ。

結局、一頻り笑った後、俺は涙の滲んだ目と笑いすぎて若干酸欠になりかけている頭を掌で支えながらルディの目線に合わせてしゃがんだ。

そして、たつぷりと間を開けて口を開く。

「あのメイドさんはな、”叔母様”が寄りこしている人だ。俺がここに来たその日に、な。」

だから、関心してたんだ。

2年間飽きずに俺をかどわかそうとし続けている、諦めないその根性と執念さに。

「気付いていたのか。なら、尚更意地が悪い。」

どこか腑に落ちないルディに、でこぴん。ついでに、言うておこつ。痛いと頭を押さえているルディにまた笑いながら、俺は最近ちゃんと伝えておきたいと思っていた事を今告げようと決めた。

「俺は、誰も信用しねーよ。」

当然お前も、そして、俺自身すら。

今の言葉には、そういった意味が籠っている。

自惚れでも、過度な期待でもない。少なくともルディは、そういったことをちゃんと汲み取れる人物だ。

「寂しいとは、思わない、のか？」

俺がそこまではつきりと、しかも自分すらその対象であるのは、長い年月独りだったルディですら思えなかったのかもしれない。若干唾然と、そして何故か悔しさを滲ませたような顔をしながら、さらに見当違いな質問を返された。だから、俺はさらに言う。

「だって、心は見えねーじゃん。」

人の本質というものは、心にあると俺は考える。生物学的に言えばまた違ってくるが、人間と人の表現の違いはその本質の見解の違いから現れている気がする。心は、学問に必要な。だけど、感情は心に左右されるし、化学的に言えばホルモンや電気信号で説明されるが、だからといってその説明で納得するかと問われればまた別だ。

だから、俺は口調も性格すら変えてみせる。それでも、ルディはイレギュラーだけだな。

俺”自身”を笑わせてくれたのは、久しぶりだから。

それでも、信用できない俺を、お前はどう思っているんだろう。

記憶が無い俺を、心がどこにあるのか分からない俺を、人間だと思ってくれるんだろうか。

心を読みたいだとか、読めればいいなんて気が触れたとしても思わないが、少しばかり胸が軋んだ。

だからといって、特別だなんて感情は持ちたくも無かった。

3 - 2 後悔先に立たず、しかしだから後悔なのだ

「っだー！なんでこうも、お前の世界の女ってこえーんだよ！」

「知るか！私に聞くな！」

お前魔王様だろ、という言い合いをしつつ、俺達は大型スーパーの
ただっ広い駐車場を走り回る。

左右前後から、変な黒い塊が飛んでくるという、オプション付きで
だ。

「私達姉妹の玩具にしてあげるわ！」

おほほほほ、と高笑いするそいつらに、もう若干なってるよとは言
えなかった。

その途端、相手が図に乗るのは目に見えている。

思わぬところから有力な情報をゲットした俺達は、次の日の午前中、
サキユバスと対峙した時とは違いある程度の計画と準備、ハプニン
グが起った場合の対処を話し合った。

そして夜。屋敷の住人が寝静まった後。

ルディの胸には、簡単なペンダントに加工したあのサキュバスだった魔石がぶらさがっている。

そして俺は、綺麗な装飾がされている剣を念のために持つ。

それは、ルディが封印された時に所持していたものであり、その為に一緒に封印されていたもの。

初戦で見た黒い空間は、言わば四次元ポケットらしい。

これをルディが出した時に、なんであの時にくれなかったのかという抗議をしたのはお約束というものだろう。

「無駄に似合うのがむかちゅくな。」

「……っつこんで欲しいか？」

久しぶりに噛んだルディは、手で口を押さえてか細くいや、いいと言った。

それにしても、大分流暢に話すようになってるなと思っていたのは、ただ単に噛まないように努力していただけらしい。

子供って、大変だったんだな。

と、思いつつ、俺は姿見の前に立った。

無駄に綺麗な装飾がされた剣は、あの時の小型ナイフに似た豪華さだ。

ただ、あのナイフは黒いカサブランカのような花の紋章があったのに対し、この剣は黒い薔薇が鍔ガードというらしい部分に咲き、茨が柄ヒルトに巻き付いている。

そして、柄頭ホメルには澄んだ青の魔石。どうやらこれは、剣の軽量化と

頑丈さ、鋭利さを増す役割を果たしているそうだ。ということ、相当な力の魔石だと思われる。

「子供用ってところが複雑だけど、むしろ丁度良いのか。」

目立たないようにする為に、黒い細身のパンツに黒に近いグレーのパーカーを着て、剣を左側に吊るしている姿はシユールではあるけど、ルディが言った通りに悪くはない。

しかしこれは子供用らしく、小柄な体型ではないけど周りより小さい自分が持つて大体膝下ぐらいの長さまでできているから、この剣が大人用だったらもしかしたら引きずることになったかもな。

だとしても、子供が持つにはでかすぎる気がして、若干首を捻った。

「言つとくが、それは物だから普通の人間にも見えるからな。」

「おう。ばれたら当然、銃刀法違反でおまわりさんと楽しい追いかっこが始まるな。でも、もし魔族が現れたらって考えたら、常備している方が良いだろ。」

優先順位っていうのは、明確にしておくべきだと思ってるからね。はははは、とわざとらしく言つてのけた俺に対して、ルディは私以上に気ままな奴は初めてだとか抜かしていたけど、それは褒め言葉だよ。

そうだと俺は思ってるよ。

「よし、行くか！」

「……お前、キャラ変わってないか？」

どことなく上機嫌な俺に、今度はルディが首を捻りながら付いてき

た。

そして、俺達は目的のスーパーへと辿り着いた。

これまでの道のりで、人に遭遇しなかったのは奇跡だろう。

とはいっても、車とはすれ違った為にパーティー帰りっぽい高級車の運転手やタクシーのおっちゃん達には若干怪しまれた。

だが、それは初めから道の左側を歩く様にしていたので、只単に深夜徘徊する若者に眉を顰めるって程度で済んでるはずなので問題なしだ。

「にしても、空気わっるー。」

「……。」

駐車場への入り口にはられているロープを跨ぎつつ、どことなく嫌な感じに思わず言葉を零す。

しかし、ルディは既に警戒態勢に入っている為か、黙りこくって周囲に意識を向けていた。

（美鈴さんの話じゃ、確か駐車場の端って言ってたよな。たぶん、人目に付かない場所か。）

なので、警戒はルディに任せて、とりあえず俺は目標を見つけることにする。

大型スーパーなので、地上の駐車場だけでもかなり広さがある。おまけに、立体駐車場もあるから、一々歩いて地道に探すよりかはある程度憶測をつけるべきだろう。

そう判断し、俺は駐車場の敷地の中央当たりで止まった。

（立体はそもそも、造る時に壊そうとするから除外するとして…。）

その場から動かず、美鈴さんの言葉を元に前方は勿論のこと後方も見ながら思考を巡らす。

敷地沿いには草木が植えられていて、目の前に佇むスーパー本体の左側は立体と繋がっている為、正確に言えば左後ろと右前後。

（壊さずに建設し始めたにしろ、壊そうとして壊せなかったからある程度建設予定を変更したにしろ、利便さからして立体側は除外してもいいだろ。だとしたらやっぱ、奥のできるだけ目に付かない場所にある可能性が一番高いな。）

営業中でもない為、辺りはシンと静まりかえっていて明かりもほとんど無いに等しい。

なので、視界よりは思考のほうに頼りになる。

よし、と気合を入れて、俺は第一候補に行こうと足を…。

「さて、何か来る。」

「封印が先に解ければそっちのほうが良いだろ。」

だそうとして、今の今まで黙っていたルディにより制止がかかった。ただ、仮に魔族が迫っていても、封印が解ければこっちのもんだ

と考えた俺は、再び足をだそうとして・・・。

「クスクス。みーつけたあ。」

(いやいや、まずは目的目的)

出そうとして・・・。

「お姉様、私は陛下わたくしよりも彼の方が欲しいですわ。」

「あら、それは丁度いいわね。喧嘩をせずに済みそうよ。」

結局、一步も足を踏み出すことなく、ギリギリと振り返ることになった。

「ちっ。バンシーの姉妹か。」

視線の先には、ぼろぼろの布を一枚被ったような感じの服の、顔面蒼白、髪はボサボサ。だけど、それでも美人だと思える釣り目の女が2人、空中に浮きながら笑っていた。

「「こんばんわ、陛下。」」

「ルデイ、お前はそのままでつけー建物の右奥に向かって走れ！んで、祠を探せ！」

そして俺は、すぐさまルデイに指示をした。顎で使うとも言っけど。

「「あら、なかなか肝の据わった子のようなね、陛下の奴隷は。」」

ルディは小さな舌打ちで文句を済ませ、小さい足を全力で動かして俺の言った事を遂行しに行った。

その後を追わせまいと俺は、バンシーと呼んでいた謎の姉妹（本当に姉妹なのかは謎だ）に向き直り立つ。

にしても、この姉妹、息びったりすぎじゃね？

「奴隷じゃねーよ。ただのお手伝いさんだ。」

ただし、ご主人様の秘密を知りたがったり、殺人現場に遭遇するわけではないがな。

「ふふ、たかが人間が、私達バンシー姉妹に勝てるのかしらね？」

2人同時に小首を傾げ、馬鹿にしたように笑う。

勿論、俺はただの人間だし？ 武術を嗜んでるわけでもないし？ 逆にもやしっ子だから、勝てるって自慢気に自信満々に言うことはできない。

だけど、少なくともサキュバスの時とは違い焦っていないし、寧ろこっちは準備万端で事に望んでいる。

予備知識もばっちりだ！

「はっ！ 偉そうなこと言っても、所詮自分の世界を捨てるしかなかった奴だろ。」

「威勢も良いみたいね？」

しかし、どうやらサキュバスのように短絡的ではないみたい、寧ろ

健全な少年を相手に遊ぶタイプのお姉様方だった様で。
結局俺は、全力で頭を回転させて策を練らなくてはいけなくなった
ようだ。

それはまあ、別に良いとして。とりあえずそのフィーリングの良
すぎる同時会話は止めて欲しい。
頭にエコーがかかっているようで、痛くなる。

「つーきー！あつたぞ！祠だ！しかもビンゴだ！」

「おまえは！一国を担う王、しかも恐怖に慄かせる魔王じゃ
なかったのかよ、このど阿呆！」

「大丈夫。2人とも私達がたーんと可愛がってあげるから。」

おまけに、ルディは喜びのあまりバンシー（敵）がいるのを忘れた
のか小躍りして戻ってくる。

しかも、わざわざ情報まで与えてしまう始末。

（泣きたい。激しく泣きたい。）

思わず地面で四つん這いになってがっくり頂垂れた。追い討ちをか
ける様に、あらあらとまったくもって余裕そくに敵に慰められる俺。

「あ…、すまん。思わず忘れてた。いや、あれだ。大分政から離れ
ていたから、な。ほら、その……。」

「いや、もういい。過ぎた事は仕方ない。しゃーねー、先にこいつ
ら倒すぞ！」

別の意味でさらに頭が痛くなりこめかみを押さえながら、とにかく
気を持ち直して立ち上がる。

「ぴっ！いた、いたたた！痛いぞつき！」

ルディへは、とりあえずのお仕置きで、頭をぎりぎりとは掴んでやっ
た。

「「じゃあ、準備運動もかねて鬼ごっこをしましょうか？」」

とりあえず、どう切り抜けていこうか。

頭をフル回転させようとしたところで、至極楽しそうに真つ赤な目
を細めてまた笑ったバンシーは、余裕綽々、そのたまった。

それが、冒頭へと繋がるのだった。

3 - 3 女の涙は恐怖で卑怯だ

自慢じゃないが、俺は怠け癖が強く、動くことも嫌いだ。

だからといって運動自体は苦手ではないが、そんな奴が運動を好むかどうかはまた別の話。

たとえ元々の体力が平均よりあつたとしても、それは気力と一緒にエネルギーとなるから、結果的に宝の持ち腐れとなり強いけど弱いになる。

何が言いたいかというと、体育の授業なんてサボる以上に価値がないと思つていて、普段からだらだらと歩く以外に身体を動かすことなんてない俺が全力疾走をそう長期間続けられる程の持久力なんて無く、さらに、前回のサキュバスは鬼の形相で追つて来ていて命の危険しかなかった状態だったから、あれは火事場の馬鹿力というイレギュラーなものだった。

性質の悪い事に、バンシーの姉妹は、俺達をおちよくって遊んでくれるだけで本気ではなく、殺そうともしていない。

つまり。

「ば、ばてたっ！」

「ばっ？！まだ5分も経ってないぞ、このもやしが！」

「うっせ！何で一々、こんなお遊びに付き合わなきゃいけねーんだよー！」

もう一步も動けない、とへばる俺を、ルディは引つ張って動かそうとする。

その間にも黒い塊が飛んでくる。”気配”がして、首を左右に振ったり足を上げたり。

隣からは、せつつくルディの文句。

途端に、何やってんだ俺と、やる気のない心の声がする。

(なーんか、考えるのもめんどろになんてきたなあ。)

「つき、つき！いいから動け！」

(ていうかこいつ、なんで祠を見つけてしかもビンゴだったのに、封印解かずに戻ってきてるんだ？)

「あら、もう諦めちゃったの？」

「なーんだ、期待はずれだったのかしら。私、ひ弱なのは好みじゃないわ。」

整わない息を吐きながら、現実を見たくなくて目を瞑り静止する。それに対し、バンシーは一旦お遊びをやめたようだ。

外野の騒がしさを無視して、俺は一旦全部をリセットした。

向こうが遊んでいるんだったら、言葉の駆け引きも何もかもが無駄だ。

無駄なことはいらない。かといって逆手に取るのも面倒だから、代わりにシンプルに。

（黒い塊がただけ威力あるのかは知らんが、避けれる。外れた塊は地面を砕くけど、そんなに挟れてないから、サキュバスの鞭よつか弱いだろうしたぶん剣で弾ける。なんでかしらんが、どこから飛んでくるかも気配で分かるし、暗いのは問題ない。バンシーがここに居るかも分かる。）

必要そうな情報を浮かべて、一緒に沸いてくる疑問には首を振ってふっつと大きく息を吐いた。

「ルデイ、時間をくれ。相手を引き付けろ。」

「……分かった。」

片膝を付いてルデイの背に合わせるようにしゃがみ、目は閉じたまま、バンシーがまた動き出しても何を一番にすべきか定まっていないままでは後手に回ってしまうと判断し、そう指示を出す。

もやしっ子なめんな。もう一回さっきのをしたら吐く自信があるぞ、こんにゃろつ。

ルデイがもちよい魔王様らしく頭使って顎で俺を使ってくれれば楽なんだけどな。

そしたら相手の表情を窺うだけだし、隙も見つけやすい。

でも、素直に俺の指示にしたがっちゃう奴が相方な時点で、夢のまた夢だなそんな状況。

どっちかっていったらは罔とかスパイタイプで、こういった参謀的

なのは向かないのに。主に、面倒なところが。

ていうことはすごくね、俺。魔王様囿にしてる時点で最強じゃね？

（なーんて。そんなこと考える余裕があれば楽なだけどねえ。）

ルディは、今のところ唯一役に立つスキル、弱くても俺様魔王様を全開に発動して、バンシーに遊ばれていた。

でもそのお陰で、頭の中をすつきり簡潔に整理できたから、後で慰めもかねて何か我俣をひとつだけ聞いてあげよう。

中身は、あまりにルディが魔王だということを忘れさせてしまいうだから、あいつの名誉のためにも黙っておくことにする。いや、聞かなかったことにしてやる。

そして、もう一度ふっつと息を吐いた俺は、ゆっくりと目を開けてその可哀相なルディの方へとゆっくり足を動かした。

さっきの追いかけて疲れてめっちゃガクガクしてるけど、なんとか頑張れ俺の足！

「「あら、回復したの？」」

「つき、策はできたのか。あいつらを全力で後悔させるような、素晴らしいものが！」

「疲れはこの通り、健気に俺に寄り添ってるよ。……取りあえず、2体同時に相手するのは面倒だ。先に片方を片付けるぞ。」

敵に勞われつつ、ルディの頭にぱんと手を置いて、耳元でこいつにだけ聞こえるように囁く。

目の前でゆらゆらと浮いている姉妹は、相変わらず余裕を持ちまくりで笑っていた。

正直、赤い目が不気味で直視したくない。

「しかし、それができたとしても、そうなれば残りが逆上しないか？」

「だったら、何か良い案があんのかよ？」

そう言えば、ぐっと口を噤む。つたく、口しか取り柄がないのかよこいつ。

「ふふ、さつきと違ってかなり冷静になったみたいね。それとも何かしら、まさか勝てると思っているの？」

「……ああ。」

良い加減、そのエコーがかつてるみたいで頭に響く声を聞きたくないし、とこれは自分にだけしか聞こえないぐらいに小さく呟き、俺は不気味な赤い目2組と向き合った。

そして、そろそろ邪魔くさくて仕方がない髪をかき上げ笑う。

「俺ってばさー、普段超めんどくさがりで怠け者なんだよね。」

「つき？何を？」

俺の雰囲気が変わったのを感じたルデイが、上目遣いでそろっと表情を窺ってくる。

それでも視線は、不気味なバンシーに向けたままだ。

「だから？」

小首を傾げるタイミングもぴったり、もうずっと2人で仲良くやっ
てるやとなんか苛つく。

それを落ち着けるため、はっと鼻で笑って、俺はルディの頭に置いていた右手を敵にも本人にも気付かれないように襟足に自然を装って
ずらした。

そして、言う。

「そろそろ、本気でいこーや。化け物共。」

「威勢だけは、……え?!」

「なっ?!」

それを合図に、構える暇を与えず動く。

俺の動きに合わせ、計3つの驚愕の声が夜の大型スーパーの駐車場
に響いた。

「おらよ、いつけー!名付けて、魔王ミサイル!」

「な、ああああ!?!」

俺は、ルディの襟足近くの服を遠慮無しにくわしと掴み、一度後ろ
にひっぱって反動を付けてから、そのまま上へと持っていく、綺麗
な弧を描くようにバンシーめがけてぶん投げた。

このバンシー姉妹、見た目も声もそっくりな上にほとんど同時に喋
ってるからどっちが姉でどっちが妹なのか見分けがつかない。

なので、取りあえずより命中しそうな、ぼさぼさの髪に落ち葉が絡

まってる方、区別をつける為にバンシー1号としよう。それに向けてルディを説明も無しに投げた為、投げられたルディは悲鳴とも驚愕ともとれない雄たけびを上げる。
相手も、俺の奇行に唾然として固まっていた。

にしてもあいつ、めっちゃ軽いな。以前、なんでか知らないが床で寝ていて、仕方無しにベッドまで移動させてやったことがあるんだが、その時に異様に軽いのは知っていたけど、それでもここまで楽にぶん投げられるとは思っていなかった。

(と、関心してる場合じゃねーな。)

俺は、魔王様をぶん投げて後を追うように駆け出し、腰に下げたあつた剣をすつと抜いた。

闇に浮かぶ銀の光沢と魔石の蒼い輝きは、より一層剣の美しさを引き立たせる。

本来、こういった剣は両手で使うものなんだろうけど、これはたぶん魔石のお陰で、片手で振るったとしても大した負担にならない程軽い。

なので、右手のみで持って切っ先を下に向け、ルディの影に隠れるように俺も1号へと迫る。

距離としては、そんなに遠くで対峙したわけじゃないから、魔王ミサイルはもう少しで1号にぶつかるところまでできていた。

そこまできれば、相手もハツと我に返ってくるだろう。

案の定1号は、慌てて両手を前に突き出し黒い塊を形成し始める。それに合わせて、2号もルディに向けて同じような動きを見せる。

そして、囀のミサイルは未だにあたふた。

その様子に、はあと諦めにも呆れにも取れる溜め息を一つ零した俺は、大きく息を吸って吐き出した。

「魔石を全力解放!!」

「っ！リヴァイ・オーヴァー！」

その指示に、ルディは弾かれたように耳慣れないフレーズを叫んだ。瞬間、サキュバスを殺した時に手に入れた魔石は、敵味方関係無しに飲み込むように眩い光を放つ。

といつても、それは一瞬。あの魔石は、そう希少価値が高いわけはないらしいので、出来て目くらまし程度だろう、上手く調節して使ったとしても3回が限度だろうと聞いていた。でも、それで十分だ。

「つき！お前後で覚えていろよ！魔王を囚にするのは大目に見たとしても、ぶん投げるとはどういうことだっ！」

次には、ルディの怒声が周囲に響く。魔石を使えと叫んだ時に、それがどんな力を持ったものなのか知っている俺達は、光りに備えて固く目を閉じたので無事。

そして、ルディに叫ぶ余裕があるから、バンシーのあいつへの攻撃は外したか放てなかつたかだ。ということとは、目くらましが成功したという結果に繋がる。

しかも、それはわざわざ考えなくても効いたと分かる状況だ。

何故なら、今、俺の足の下にはバンシー1号がいる。

「油断大敵。ご愁傷様だ。」

「っ…、何?!なんで重い?!目、目が開けない。くそっ!」

目は光にやられ、痛みからか瞳を押さえてはいるが俺の全体重を乗つけてる為動きも封じられ。

焦りながらお姉様と咳こうとした口は、最後まで言うことが叶わなかった。

「こっふ…!あ、あ…」

「あ、こっちが妹だったのか。わり、ややっこしくなりそうだし、今更だわ。」

俺は、1号を押さえつけながら剣を眉間の上へと掲げ、そしてすと落としした。

体の構造が違うのか、それとも剣が不思議なのか。それは阻まれることなくサクツと眉間を貫き、コンクリへと達する。

何度か小さな痙攣を繰り返した1号は、言葉にならない声を最後に動かなくなった。

そして、さらさらと砂に変化していく。

足からだったので、頭が砂になる前に剣を引き抜いて1号の上から地面に戻ると、剣は更に輝きを増したと思える程に光沢を魅せている。

俺は、バンシーには血が流れていないのか、何も付着していない剣を気分でピツと一度払った。

「ルディ、気合い入れろよ。こっからが本番だ。」

そんな俺に、文句の一つでもかまそうかと憤慨しながらやってきたルディに、2号へと視線を向けながら警戒を促す。

2号は無言で、赤い目を限界まで見開いて、俺の後ろの1号が砂になる様子を凝視していた。

時たま口が何かを発しようとして開き、それが叶わず閉じる。

俺はその様子を、じっと観察した。

なんだろう、この気分は。

高揚するような、内からしみ出てくる不思議な感じがする。

今までにないぐらい神経は研ぎ澄まされ、精神も集中していた。

それはもう、今まさに魔族を一体葬り去ったとは思えない程。

これまでの人生、動物にしろ何にしろ、明確に命を奪ったという自覚を抱ける状況に直面してきていない人間が、こんなにも冷静にそして冷酷に動けるものだろうか。

こういうことに関しては、例え無気力無関心、適応能力に優れている俺でさえ、初めての次にはもう慣れることが出来るとは思えないのに、だ。

（殺気が分かる。剣の握り方が分かる。 - - 戦いの心得が、分かる。）

恐怖心は勿論あるし、自分が弱いという自覚もある。それでも自然と、口角が上がっていく。

俺の視界には、悲しみを抱き憎しみに染まるバンシー2号しか映っていないかった。

「どろした、つき？」

「っ、来る！」

丁度、1号の身体全てが砂へ変わった時、2号は心に溜まったモノを爆発させた。

「……………!!」

滝のような涙を流して目をカツと見開き、こちらを凝視しながら開いた口から、この世のありとあらゆる叫び声を合わせたような凄まじい泣き声が俺達を襲う。

それが、地球では死を予告する妖精と伝えられている魔族の、全力で本気の攻撃だった。

3 - 4 それ現実

「ぐっ……！」

「耳が、壊れ、るっ！」

動くこともままならない、そんな音を聞いたことがある奴はどれだ
けるんだろうか。

バンシー2号の泣き声に、俺達は耳を押さえて呻くことしか出来な
かった。

耳は勿論、頭も割れそうなほどの痛みに襲われ、自分が今立ってい
るのかどうかも分からなくなる。

そんな俺達に、尚も容赦なく降り注ぐ叫び。

『許さない、許さない、許さない！』

声自体は、言葉でも何でも無い。でも、その奥から襲いかかる2号
の気持ち俺達をぎりぎり締め上げていく。

といっても、罪悪感に苛まれるわけではなく、向こうの憎しみに引
きずりこまれそうになっていくといったら伝わるだろうか。

『なんでもの子が。なんでもの子を！好きで堕ちたわけじゃないの
に！見返したかっただけなのに！こんな魔王がいるから、あんな世
界があるから、全部全部全部、消えればいいって思っただけよ！』

だけど、響いてこればくる程、どんどん俺は憎しみとは違う苛立ちを覚えた。

だって、なんだその理由は。なんだその、自分勝手な解釈は。

「ふっ、ざけんじゃ、ねーぞ…！」

上から圧迫されるような音の攻撃で地面に付いていた膝を叱責し、俺は立ち上がりながら思わず閉じていた目を開ける。

『うるさい、うるさい、うるさい！』

2号は、瞬きもせずに涙を流し続けていた。
罪悪感？恐怖？

（はっ、くだらねえ。）

いくらこの平和な日本にいたってな、戦いというものを知らなくたって、分かることはあるんだよ。

「てめえ、は、ルデイの力を、奪おうとしてたじゃねーか。んの、くせ、自分が奪われたら、理不尽だ、と？」

けったいなご身分だなあ、と笑えば叫び声はさらに強くなる。
でも、冗談じゃない。

「馬鹿、か、てめえ。この世は、なあ、理不尽しか、ねーんだ、よ
！」

ぎりつと、この状況でも手放さなかった剣を強く握り締める。

もう片方は、あまり意味を為さないが耳を押さえ、俺は少しずつ2号との距離を詰めようとした。そうすれば、尚更音が俺を襲う。

それでも、この音以上の脅威的な攻撃をバンシーは持っていない気がした。

この攻撃も、物理的というよりは精神的なものの方が大きい。他にあれば、俺達はとくにその餌食になっているはずだ。

「まさか、自分が、特別だとか、思ってる訳じゃねえよな。さすがに、堕ちた奴が、そこまで凶太いとは、思わねえ、し？だけど、それで、も、馬鹿みてーに、頭ん中だけでも、まさか、世界は平等だ、とか、思ってたのか？自分の、都合よくにしか、解釈してねーん、だろ。」

『黙れ、うるさい、黙れ小僧！』

この音の中でも、俺の声は届いているようだった。その言葉に、2号は激しく首を振る。

ほんと、嫌になる。当たり前前にルディの力は奪っていいと思っただり、自分達の予想外な事に発展していけば、あんな理由を並べて現実を見ない。

あまつさえ、まるで自分達は悪くないと言うようなあの言葉。

しかも、それを否定されたら受け付けなときた。

「あれは、ルディの力、だ！それが、分かってて、手出すんなら、逆に奪われる、覚悟くらい、してこいつーんだよ、雑魚が！」

「つき！」

よく考えずに、しかも吼えるように言葉を発する。その時、すっかり俺等から存在を忘れられていたルデイが、タツクルする勢いで俺に抱き付いてきた。

「リヴァイ。」

そして、サキュバスの魔石でも言っていた言葉を、さつきより短くして呟いた。

瞬間、2号の声が止む。

むしろ、全ての音が消えた。

「……」

目の前のルデイが何かを言う。それすら聞こえず、俺は首を傾げる。それでもさらにもう一度、ルデイの口が動く。

やっぱり聞こえなかったけど、今度は意味を汲み取れて俺は頷いた。

(さっきの1号から生まれた魔石の力だろうな。)

片耳を塞いでいた左手を外し手をルデイに差し出せば、案の定そこにくすんだ青にも緑にも思える色の魔石が落とされる。

どうやらこれは、音を消す防音の役割を果たしてくれるようだ。しかも、魔石を持っている者に触れている者にまで効果が及ぶらしく、ルデイも落ち着いた表情を見せた。

「さんきゅ、あと少しだけ辛抱してくれな。」

血の上っていた頭を冷静にさせてくれたことと、俺の代わりにこの

音の対処を見つけてくれていたこと。その2つに短く礼を言い、貰った魔石を握りしめて剣を構える。

今はまだ、ルデイが俺のズボンを握っているから魔石の力でその言葉は聞こえなかっただろうが、分かってくれたのか深く頷いて2号を睨み付けていた。

俺も、視線を2号に戻す。

サキュバスの瞳は、深紅だった。それに比べ、バンシーの色はくすんだ赤。

それが生気を感じさせず、だから気持ちが悪かった。

見た目も、幽霊みたいで不気味だから、どことなく殺すというよりも成仏させるって感じがした。

だけど、剣を突き立てた時には、確かにサキュバスと同じように命を奪う感触がして。

こいつ等が欲を出してルデイの力を手に入れようなんて思わなければ、俺はそんな感触味わわなくて済んだだろう。

そう思わなかったといえは嘘になる。

けど、だからといって、それを奪った相手に、奪おうとする相手に理不尽だと文句を言う奴がいるだろうか。

いや、いるかもしれない。それだけ世界は広くて、心を持った命も多いから。

それでも、それは自分勝手な我俣でしかない。

そもそも、だ。俺は思うんだ。

理不尽だとか、不平等だとか、特にこういった命のやり取りをする

場面でそのたまうのはただの馬鹿だと。

平等を求めるのは、無駄だと。

「おい、雑魚野郎。俺がちーつとばっかし、情けかけて教えてやるよ。」

突然の無音な世界を味わいながら、俺は冷静になった頭をひっさげ、てゆつくりと歩を進めた。その途中で、右手の剣を止めを刺す為に左の腰側に持つていく。手首を丁度腰のくびれに添え、切っ先は下に。自然とそんな構えをとっていた。

『お願い、見逃して。』

それを受けて、2号の口がそう言った。

合っているかどうかは分からないけど、動きからしてだいたいそんな感じのものだろう。

諦めたのか、他に理由があるのか、逃げる素振りも見せず固まって動かない相手に俺は首を振る。

『ねえ、お願いだから。もう邪魔しないから。』

もう一度首を振る。2号の涙は、1号へものから自分のものへと変わっていた。

「そつだ、これこそ理不尽だ。でも、喧嘩売ってきた時点でそんなもん何の意味も為さないんだよ。」

距離はどんどん縮まっており、あと5歩程歩けば2号に触れられる

ぐらいに近づいている。

俺はより一層、睨みを強めて笑った。

「戦いに、其々の理由なんて関係ない。勝った方が正義、そうじゃねーの？だから俺は、最後に勝てるなら何度試合に負けたって良いと思ってる。いくら殴られて痣作ろうが、罵倒されようが、な。」

その笑いは、後ろで一生懸命声に耐えているルディに対してだけ。突然振り向かれたルディは、流石に声は聞こえなかったのか、俺が笑った理由が分からず一瞬きよんとする。その間に、視線を2号に戻した。

「あー、忘れてた。んで、さっき言った教えてやるつつった内容だけ。」

だいたい3歩ぐらい手前の目的の距離まで詰めた俺は、最後のメに取りかかる。

まず、ルディやバンシーの真似をして小首を傾げ、左手の人差し指を立てて自分の口に当てた。

これ持論なんだけど、人に言うと人格疑われるから内緒な、と今から殺す相手に最低な言葉で前置きしながら。

「人生も世界も、何もかも。俺達に起こる事も得るものも、平等に不平等じゃね？たぶん不平等こそが、平等って意味を持つ気がすんだよな。」

目を細め、俺的に最高の笑みを2号に贈り、そして一閃。

ずっと構えっぱなしだった剣で、バンシーを左下から右上に切りつける。

『お前は、何？』

まるでこの世で一番恐ろしいものを見たというような恐怖に染めた顔をしながら、バンシーはその言葉を最後に1号より早いスピードで砂へと変化した。

「俺も、知らねーんだよな、残念ながら。」

たぶん人間だと思っただけどねえ、その言葉はきつと、耳に届く前に終わってしまっただろう。そもそも、今の会話が成立してたとも思えない。

キンッと剣を納めて、苦笑する。

「つき。」

「お、いつの間に。無事、殲滅完了だぞ、魔王様。」

内に籠りかけた俺を引き戻したのは、気付かない間にまたズボンで掴んで魔石の力を止めた小さな魔王様。
そのルディは、どこか不安そうに瞳を揺らしてこっちを見ていた。

「らしくない冗談はよせ。つきには、魔王と呼ばれたくない。それよりだ、怪我は無いか？大丈夫か？」

（らしくない、か。）

何を分かっているんだかと思いつつ、その小さな背に合わせてしゃがみばんぽんと頭を軽く叩いて小さく笑った。

（そつちこそ、心配するなんてめずらしい。それとも、心配させる程俺がおかしかったのかねえ。）

びんびんしてるぞと答えながら、俺は目の前のチビと出会ってから感じるようになった自分への違和感に少しだけ、ほんの少しだけ不安と恐怖を覚えた。

まるでそれは、今まで頑なに閉ざしていた扉が開いてくるような感じ。

鍵が開くとかじゃない、扉が開かないように繋いでいた何本もの鎖が一本一本、徐々に朽ちていくような。そんな、気配。

「で、だ。お前は何で、見つけたのに封印を解かずに俺のところに戻って来たんだ？自分で解けるとか言っただけじゃなかったか？え？」

「いた、いたたた！ま、まで、説明を、ちゃんと説明するから。その頭ぎりぎりは止めてくれ！」

だから、俺自身を誤魔化すようにルディの頭を締め上げて、気付かない振りをした。

そんな俺の事を、ルディが予想以上に見て、考えていたなんて。

封印が全て解けた時、色々な謎が解決すると思った。

でも、たとえそうだとしても、その時その場に俺はいない。

それだけが、今の所確実に分かっていることだ。

美鈴さんの言っていた祠は、ほんと小さくてボロクで、朽ち果てる寸前の寂しい姿をしていた。

「祠に何か術がかけられていて、触れなかったんだ。」

ルディは今、どんな気持ちでそれを見ているんだろうか。

俺にはただの祠にしか見えなくて、何が駄目なのか見当もつかない。ルディがほらっと小さな手を伸ばして触れようとした。

「うお！」

「っ……っ。」

すると、祠に触れた瞬間、ばちっと大きな音がして電撃のようなものが光り、ルディが瞬時に小さな手をひっこめて痛そうに摩る。

（んー、結界、みたいなもんか？）

その様子に、いくつか思考を巡らせた。

この結界のようなものが、ルディのみに反応するのかそれとも魔族に反応するのかとか。5つ全てにこういったものがあるのかとか。

まあ、いくら考えても、予想の範囲を出ないので、取りあえずは俺

が触れるかどうかを試す必要がありそうだ。

「封印って、そついやどうやって解くんだ？」

「恐らく、何か器のようなものを媒体にされているはずだから、それに私が触ればいい。」

その答えに、ふーんと納得。ただ、ここまでファンタジーに接してきた為、こつ格好良く呪文とか唱えるんじゃないのかと、意外には思った。ほら、中二病的なぞ。

「んじゃ、祠は壊れてもいって感じか。」

「まあ、影響はないだろうが、しかし。」

「そいつ。」

「んなつ?!」

考えても仕方がない、という考えに至った俺は、触れるという選択をせず、戸惑いも躊躇も一切無しに、膝上ぐらいのそれを蹴り倒した。

蹴るといふより踏む、と言った方が正しいかもしれない。

それだけで、祠はバランスを失い傾き後ろに倒れる。

「罰当たりだろ！」

「いや、祀られてるのってお前の力じゃん。ご利益も罰もあったも

んじゃねえだろ。」

俺の行動は、つくづくルディの予想の範疇の斜め上をいくらしい。それはそうだが！と息巻くルディを放置しつつ、祠の残骸を漁る。

いやあ、崩れた柱とか触る限り、さっきのみたいにはちつと来ないから良かった良かった。

「あいたっ！」

横では、諦めずに自分もと祠の残骸に触り拒否されて、たぶん痛み以外の理由でも涙ぐんでいる子がいるが。

そうしてしばらく、短い悲鳴と自棄になって見えない何かに立ち向かう鬱陶しい息遣いをBGMに、俺は目当ての物を探した。

といっても、どれがそうかなんて分からないから、それっぽいものを見つけては、どっか別のところに集中してるルディ目掛けてぽいっと投げつけているだけだ。だから、たまーにそのせいで悲鳴をあげてる。

ただ、あまりにもそれに気付かないから、後半は明らかに違うだろうってものまで投げて、普段の憂さ晴らしをしていた。

「つき！お前か！」

「あ、ばれた。」

そして、とうとうばれる。まあ、そうだな。何も触って無いのに痛みが来たら、流石に気付く。

「さつきから、頭や背中が痛いと思ったら！何を遊んでるんだ！」

「いやあ、ルディだつて遊んでたし？」

「私は戦つてたんだ！戦つて、たんだ！」

（何故2回言つたし。）

憤慨して詰め寄ってくるルディ。

手は拳を作り喚くのでまあまあと宥めつつ、何かの装飾だったのかもしれない小さなガラス玉のようなものを右手に握って止めの一発に投げてやるう考えた。

しかし、絶対当たるといふ確信が出来るぐらいに警戒心が薄くて、投げる前から笑いが俺を襲う。

「何を笑うんだ！」

「いや、くつ、なんでも、ぷっ。」

「なーぜーわーらーうー！」

憤慨を通り越して憤怒になりかけてるルディに、そろそろやばいとは思っただけど、ちょっと喋るのも難しいぐらい本格的にツボにはまってきた。

ちよつとタンマという気持ちを左手を前に翳す事で表現し、右手を口元へ。

つまり。

「もう我慢ならん！つきにはしつかりと、主に仕える従者の心得たるものをその身に叩き込んでやるっ。」

(どうみても、今のは馬鹿にしてる仕草ですよ、はい。)

小さな体で全力で、俺に向かって来ました。

馬鹿にすることなかれ。あの突進は、かなりの攻撃力を持っており
ます。

なので、さつきからまだかまだかと期待を大きくしている右手の物を今こそ使う。

「これ程従順な下僕はいないと自負しているので、結構であります
ご主人様！」

「うわたっ！」

見事なフォームで繰り出されたガラス玉は、見事にルデイの眉間に
命中。

だけど、そこで予想外な事が起こった。

勿論それは、俺等が当初の目的を忘れていた為に予想外だった、と
いうことだ。

「お、ビンゴだったか。さすが俺！」

「な、な?!」

ただ、俺は直ぐにその様子から思い出して冷静だ。でも、おこちゃ
まなルデイは本気で驚いていた。

俺が投げたガラス玉こそが、ルデイの力を封じていた器で、そして持ち主に触れたことにより力は目覚める。

「心の準備くらい、させろうおおおお！」

例え、持ち主を置き去りにしたとしても。

そうやって、俺達の最初の封印は解かれた。
眩い光と、黒い影を生みながら。

光と影。

それは、相対しながらも、決して切れない絆のように離れないもの。
例えば、ルデイと俺のように。

ただ、俺達の場合はどちらがどちらという訳ではなく。
お互いがどちらでもあるという、矛盾した繋がり。

弾ける光の中で、俺は影を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0491w/>

最強魔王と下僕様!?

2011年10月11日06時57分発行